

# 大日本地震史料

## 卷之十四

弘化四年三月二十  
四日信州地震ノ三

〔見集録〕善光寺地震取調材料六册ノ内、乙、  
文部省震災豫防調査會所藏

○本書ハ、長野町ノ盲人小野善太郎ノ集録セシモノニテ、全編十二大册ニ  
分ツ、今其ノ中ニ就テ、地震ノ記事ニ係ルモノ、ミヲ抽録セリ、

### 善光寺大地震、大焼の有増、

弘化四丁未年三月廿四日、當山如來開帳半之事故、山内并に  
町々一統之賑ひ、夜分は萬燈白日之如く成所、夜四ツ時、俄に  
大地震雷の如く、忽寺院、町家、土藏等迄、一度に搖潰し、闇  
夜となり、程なく數ヶ所々出火、一時に大火となり、家毎に  
泣呼ぶ聲、<sup>(叫カ)</sup>天地にひびき、艱苦をなし、子の刻に至り、山内并  
町々の小せき<sup>堰</sup>に、家藏の木かべに<sup>(等カ)</sup>落入、水をせき留、往來に  
水溢れたる處もあれど、火を消んとするものなく、思ひ／＼、  
に野中へ出、只忙然たる有様なり、近郷村々より地震のとき  
れを見合、親類并熱意之ものへ欠付、いまだ聲あるものを助  
け出し、又火の手を防んとなせども、寄付ならず、丑の時に  
至れば水絶へ、家々之井戸は、壁落崩、水の氣なく、火はます  
ます盛んとなり、風未申の方より烈敷、如來の御堂は煙之中

弘化四年

となり、既に危く見へ候處、不思議なるかな、此折柄三門<sup>(山)</sup>、御  
本堂の屋根上に、數多の人影あらわれ、八方へ欠廻り、火の  
手を防ぐ體、見留たる者多く、夜明におよび、御屋根の上に  
人影見へず、風もかわり、明れば廿五日、火氣益烈敷立登り、  
市中一面に火となり、斯る處へ松代様方御防之御人數、并六  
川御陣屋よりも御出張、後町口漸々消口に相成、同夜命を助  
り候もの、野田に伏居り、折柄雨降り、誠に歎敷事に候、地震  
止み不申、廿六日、燒殘また／＼燃出し、都て二夜二日にし  
て漸く燒止り、御山内大本願上人様、院内不殘、并衆徒廿壹  
院、中衆十五坊、妻戸拾坊、都て四十六坊不殘、上人様御門前  
小間物見世不殘、二王門西側建續之茶屋小間物店不殘、堂庭  
中見世物莖張の小屋、大小とも不殘、御本堂<sup>(山)</sup>三門、經藏、鐘樓  
は相残り候、御別當大勸進様、半潰れ燒殘り、萬善堂無難、町  
家之分、大門町、東町、武井小路、西之門、東之門燒失、横澤無  
別條、樓小路、阿彌陀院、西町、荒町、立町、伊勢町、新町、同裏  
通り非人小屋、并片羽不殘燒失、叔岩石町、東西横町、田町不  
殘、裏田町不殘、畑ヶ中、上後町、中後町不殘、下後町にて止、  
消火、叔又北國往還續横山村搖潰、相之木村西組燒失、善光  
寺市中寺院は、東町康樂寺、寺家とも不殘、權堂村不殘、明行

弘化四年

寺并に寺家共不殘、西町西方寺は無別條、庫裏潰れ、東之門  
 寬慶寺不殘、田町普濟寺、岩石町虎石庵、伊勢町聖臨庵、權堂  
 村往生院、其外社地十七ヶ所、潰家、死人有之、同廿七日、至  
 漸く火鎮り候へども、銘々家跡を掘、白骨をひろひ、中には  
 半死半生も有之、戸板にのせ、野田へ引取介抱いたし、また  
 其夜止宿之旅人は、我が同行の死骸を其場にて焼も有之、白  
 骨をひろひ、中には不分明は改之上、無縁堂江納め、半生之も  
 のは、御救小屋を掛、御手當有之候處へ引取養生いたし候も  
 有之、如來尊を御本堂裏丑寅之方堀切と申處江、御假小屋相  
 建、其所へ御うつし、御別當大勸進様御始、三寺中僧侶守護  
 有之候、且又旅人の白骨は、御境内之内新規地所をえらみ、  
 其所へ不殘相納候、

立札之寫

横死人遺骨納所、

山内、市中止宿旅人、百ヶ日に至  
 り、法事修行有之間、有縁之者、  
 參詣焼香可有之者也、

知事、

一如來様御小屋前にて、困窮人粥施行有之候、

松代領八丁町甚五郎と申者、御堂庭江出張、三日之間、

米穀安直段賣渡申候、

一大勸進様々、市中銘々江、白米五升宛被下候、

善光寺山内、并市中取調大略、

一寺院焼失、前に有之、

一山内之住持僧八人、

内衆徒三人死、  
中衆五人死、

一市中壓死人、凡貳千人餘、

尤他所止宿之ものは除、  
人別帳に有之もの許、

一壓死旅人、凡千人餘、

一同牛馬、いまだ調中、

一搖潰家棟數、凡五千軒餘、

一廿四日夜地震後、犀川之水、日に減水、丹波島舟渡し、壹ヶ  
 所に相成、犀川流水絶、歩行にて往來渡候様に相成、川中  
 島并川邊村々、大騒動と成、銘々山林江蕪張小屋をしつら  
 ひ、家内不殘引取、水之出來るを相待候、

一丹波島川渡と唱ひ候、此川上、更級郡、水内郡兩郡之境ひ、  
 水内之橋下に、赤岩村と申一村、山拔にて深谷を埋め、又  
 其下に安庭と申村にて、貳ヶ所山拔谷を埋、名ある急流大  
 河候へ共、水道ふさがり、數日水湛候事有、新町村、穗苜  
 村、牧之島村を始十ヶ村、水中にしづみ、民家浮み、水湛へ

候處、見渡し、谷奥へ八九里程水溜り、谷幅之儀は三十町、又は貳拾町、山間之事故、町數不同、里程分り兼候程之事に付、御領主様御役人衆中、場所江御手當有之、其上川中島へ嚴重御下知有之、數百ヶ村、居家を立退、西之方小松原山、岡田村山、東は西條山、保科山、最寄々々の山林へ小屋を掛、村々空居と相成、矢代宿を北國往還關川宿迄は、人馬繼立出來兼、御武家様御荷物、右宿を持荷にて附通し、川東通りと申所御往來有、深か谷より廣野へ水の出小市村舟場之所、川中へ地震にて小山出來候に付、出水之節は突かけ、田畑へ押込可申と、御領主様御役人御出張、數千人の人足にて、石俵を作り、高土堤三重に築立、水除御手當有之、猶又火術方命せられ、深谷の水押出し候節、合圖之狼煙を、最寄山之高みにて上げ候様に御手配有之、其合圖を心得、里村に残り居るもの、并に往來之旅人、急ぎ山之手へ逃れのぼり候様御示に候、其上助舟、筏等、村々江御渡御用意有之候、誠に前代未聞之珍事、御役人御出張先にて、大釜數ヶ所御立被成、御焚出し有之、數千人の人足食事御手當、其外筆紙盡し難き御手配有之候、數日水も出不申、村々之もの共、居村江立戻り、耕作に取掛候ものも有之、油斷いたし候處、四月十三日晝七ツ時、俄に小

市口を、大山之如く水煙りを立登り、數十丈の大水、一時に押出し、南岸の山方も高く溢れ、眞先に小市村とまくりに缺崩れ、村家數十軒流失、小松原村七分通流失、中島村流失、氷鉋村數十軒流失、丹波島宿貳拾軒餘流失、南之方御幣川村限り、川中島一面、水中と相成、小森村流失、眞島村流失、犀川、千曲川兩河、一面に相成、松代御城裏迄、大水押出し候得共、先年御築立之土堤にて止り、御城内江は水入不申、此邊は村方も溺死無之、川中島にては、多人數溺死有之、夫より千曲川一筋大水と相成、川東高井郡、西は水内郡、越後國まで川邊之村々、水損溺死夥數候へども、未だ委しく調兼、追々見聞之上可書記候、

大地震に付、松代御領内御觸書之寫、

大地震後、引續大水難に及候處、場所により多少有之候得共、彼是御領内一統之變死、凡三千人に及び、潰家一萬軒、怪我人夥數有之、何共歎ヶ數次第、言語に絶候、當座之御手當筋之儀は勿論、往々取續方之儀迄、厚御憐愍可被成下候、難有御趣意之程、銘々相辨、心得違無之様、如堪罷在、如何様に茂相勵可申候、若當座之御手當筋、行届兼候村方は可願出、村役人共等閑に罷在、難澁人別之内、萬一離散いたし候様の事有之候ては、無念之事に候、難澁人別之ものども、村役人

弘化四年

等閑にて、格別難澁に塞り候次第申立も不致、猥に離散いたし候ては不相濟事、右體之もの有之候はゞ、嚴敷答可申付候、幸に變災輕き村方、又は人別之内、冥加之程を存付、御救方江獻上物致し、或は融通方専ら心掛合力致し候者共相聞、奇特至極之事に付、追て褒美可被下置、猶此上銘々相勵出精いたし候はゞ、一段之事に付、村役人承届、右奇特之もの名前譯柄可書之、且多く之村方に付、若御救筋に相もれ候者有之候ては、御趣意相洩候間、村役人共能々相心得、彌以深切に取扱、小前末々迄、不洩様可相觸もの也、

四月十八日、

同御觸、

去月大地震以來、満水等非常之變災、一統難澁之時節に而小屋掛、其外作事多之儀に付、大工職人等、幾重にも出精可相勵事に候、萬一心得違にて、作料日雇、是迄定之外、餘分受取候ては不相濟事に付、其旨急度相守、心得違無之様、實意稼可致旨、諸職人有之村方は、役人より申通、銘々其段可相心得者也、

四月廿日、

松代御領内御調方寫、

一御領内損高三萬二千八百五石餘、本田共、新田共、

内 田方一萬八十五石餘、  
畑方二萬二千七百廿石餘、

一民家潰七千六百七十二軒、

四十九軒、燒失、

二百軒、燒失之上湛水に入、

六百軒、湛水にて浮出す、

三百軒、山崩土中埋、

六千五百十七軒、潰、

一壓死人二千七百七十五人、

内 社家一人、僧十人、

男千二百廿二人、女子五百四十二人、

但し三百四十六人は、山拔土中へ埋、死骸相知不申候、

一壓死之穢多、七十八人、

内六十七人、土中埋、

一斃牛馬、二百六十七疋、

内六疋、土中埋、

弘化四丁未稔三月廿四日亥之上刻大地震に付、諸御領主方御公儀江御届書寫、

過日先御届申上候通、私在所信州松代、去月廿四日夜、未曾有之大地震に而、城内櫓一ヶ所震潰、其外櫓、門、圍塀、住居

向大破損、其上所々地面震裂、幅八九寸位、數間筋立、家中屋敷之儀は、南山手江附候分は、破損輕く御座候得共、潰家或は半潰、其外一統破損所有之、城下町之儀も、潰家、破損所、死失人も有之、其外領分村々一統之儀にて、場所に寄り、七八寸或は貳尺四五寸、地面震裂、數百筋立、右々土砂水燒石之類吹出し、田畑之中地陸、或は高く或は低く、種々致變地、扱亦山中筋は、尙更拔覆夥敷、土中に相成候村方も有之、其上兼而申上置候通、更級郡之内山平林村地内高山崩落、麓之村は、大磐石、一同犀河江數十町之間押埋、流水堰留、日々水嵩相増、凡廿五六丈之湛水、上は八九里餘之間、湖水之形勢に相成、右に付河添之村々は、數ヶ村倒家、或は燒失之上、數十丈之水底江沈み沒去仕、此上五七日茂水湛候はゞ、拔崩押埋之場、水乗可申哉之旨、追々注進申出候、其外土尻河と申は、犀河方北に而御座候へ共、是亦河上山崩、流水途切、去十日迄湛水に相成居候所、同日晝過、崩埋之場押切、一丈餘之大水、俄に押出し候處、暮に及、追々減水仕候、尤元來犀河江落合候水筋に御座候所、地震以來干上り之河筋、流落候故哉、河丈之流水に而、破損所は御座候得共、先格別儀には無御座候、然る所前申上候犀川上手、數十日之湛水、一時に押出し候節は、河中島は勿論、下續御料所村々、如何様之變災

可有之哉も難計、殊に犀河江、小市村渡船場之所字真神山、是亦犀河中江崩落、川中多分押埋候間、此度湛留候犀川水、一時に押出し、真神山拔崩場江突懸候はゞ、猶亦如何様之異變出來可申哉も難計、右之場、差向時々手當普請は申付候得共、中々以不容易儀に有之、且支配所之儀、多く同様に御座候處、就中、善光寺之儀は居家震潰、右に而致出火、本堂、山門等之外、一圓燒失、死傷夥敷趣に付、早速家來差出し、米穀入足等、當座之手當申付候儀に御座候、一體私領分、飛地無御座、地續一纏に御座候處、此度之災害逢候村方は無御座候處、山中筋は犀川水湛、并道形多分拔覆、往來不相成場も多く有之、委細取調も出來兼候得共、去る十日迄に相糺候分、城下町方山里村々、凡潰家、半潰共、八千七百四拾七軒程、死人、怪我人三千九百廿四人程、斃牛馬二百五拾五疋程に御座候、右等之次第に而、死失、潰家無之村方は、纔之儀にて可有之、歎息至極に奉存候、勿論救方手當、精々申付候得共、差向苗代時にも罷成、麥作取入等、肝要之氣候にも追々相成候處、震漸輕相成候得共、鳴動は今以數拾度有之、百姓共恐怖悲歎に沈み途<sup>(方脱カ)</sup>を失ひ、忙然と而已罷在候に付、役人共差出し、撫育爲致候得共、安居仕兼、加之、河中島平之儀は、犀河水湛に而流水無之、用水差支、渴にも及候仕合、絶言語候次

第、乍然難捨置、萬一心得違へ人氣も、此節之儀に付氣遣敷奉存候間、人心落着、銘々取復之手段、救方、可成丈可申付儀に候得共、城修覆(候脱カ)を初、家中、城下町、領分村々、一統之儀に而莫太に有之間、行届兼申候、其上猶犀河之變地、如何可被成哉、心痛當惑至極に奉存候、御時節柄奉恐入候得共、何分難及自力候、依之格別之以、御憐愍、金二萬兩、拜借被仰付被成下候様仕度奉存候、此段不得止事奉願候、以上、

四月十二日

真田信濃守家來

私在所信州松代、先御届申上候通、大地震に而更級郡山平林村之内岩倉山拔崩、犀河へ押埋堰留候處、去十三日夕、一時に押切、右河筋江押出し、里方江之出口左右之土堤押切乗越、夫々川中島一圓水押來り、城下カ一里程上、同郡横田村邊カ千曲河下續江、一面に押入候水勢甚強く、下筋カも追々湛來り、溢水に相成、專致逆流、居城際迄押上、城内地陸カも水高に相成候處、去る文政年中、御聽置申上築立候水除土堤にて相凌、尤所々及大破候に付、種々手當申付、急難相防候内、致減水候故、城内江は水入不申候得共、城下町江は、餘程水押入申候、右様之次第に付、流末、河邊村々御料所中野平邊迄致充滿、如湖水相見へ候處、追々減水候に付、早速見分差出し候得共、大小橋々、多分流失、其上水引候而も、地窪之所

水溜り居、或は道(損脱カ)、或は押堀等に而、通路難相成場所所有之、凡見積りも出來兼候得共、犀川湛場破方之儀は、段々水嵩相増、深さ貳拾丈にも及び、少々宛水乘に隨ひ、岩倉山麓之方、追々缺崩に而水筋相付、大水乘初候と、一時に押埋候巖石等押崩、麓之方江も多分缺込、數十日之湛水、河中島へ押出し候儀に御座候、右爲防此度石俵等を以、俄に急難除爲築立申候、然る處右は川中島其外河邊御料、私領村々之爲に付、領内人夫は勿論、近領水冠にも可相成村々カも、多く人數差出し、精々普請致し候儀に御座候へ共、廣大之水勢にて、暫も不保、不殘押流し申、且亦水内郡小市村之内字真神山、先達而拔崩、高貳拾間程、横五拾間程之所、犀川へ八拾間程押出し、殘川幅僅に相成、其儘差置候ては、聊之水にては河筋致變化候儀に付、精々掘取候へ共、巖石等多く、行届兼候處、此度之激水にて忽に押流し、百數十人にて難動程之大石を、河下或は河邊村内耕地江押出し申候、其邊之水丈六丈餘にも及び候付、川邊村々之内、更級郡四ツ屋村之儀、軒別八拾軒餘之内、六七軒殘、悉く流失、跡一圓之河原に相成、右に準じ、居家不殘押流し候村方も多分有之、其上山中筋水附之山、多く缺崩候に付、大木等押出し、是が爲に被押倒、流失致候居家も不少、流家凡六百軒餘、其外石砂泥水入數多有之、流死人

も御座候趣相聞候得共、未相分不申、且水溜居候次第にて、損地等之儀は、中々凡之見積も不行届、北國往還丹波島宿邊の千曲河、犀河落合之邊は、一圓亂瀨と相成、丹波島驛并脇往還川田宿、福島宿之三宿、前文之次第に而、人馬繼立も出來兼候、且亦河邊村々之米穀之儀は、山手村々江相移し候様、兼て申付置候へ共、其外近邊之村々は、縦水押來候共、流失は致間敷と心得、棚等拵候而上置候穀物、居家一同致流失候儀不少、右に付、村々爲救方、所々江役人差出、喰物炊出し、并小屋懸手充等、專申付候、殊に川中島村々は、犀河を引取候用水堰三筋、外に壹ヶ所水門、跡方も無之押埋候に付、吞水一切無之、救方喰物炊出し之儀も、場所に依り、二三拾町も遠方々水運候儀に御座候、畢竟前條土堤普請之儀も、右様之儀無之様仕度、急難防に付、地震にて居家震潰候村々之者迄も、申渡を不相待、日々出精築立候處、其甲斐無之、一時に致破壊候に付、居家流失、水冠等に相成候者は、猶更之儀、一統途方に暮罷在、日用之吞水は勿論、眼前之苗代水引方、堰普請も、早速行届兼申間敷、必然と差支、人心不穩、甚不安心に奉存候、專手當方申付罷在候へ共、城内初、家中屋舖破損、并城下町、領分村々、潰家、死失人夥敷、田畑道路地裂、地陸床違に相成、亦は山拔覆等之大變災打續、此度之大水患、且今

以鳴動止み不申、何共氣遣舖次第、甚以心痛仕候、委細之儀は追々取調可申上候へ共、先此段御届申上候、已上、

四月十八日

御名 ○真田信濃  
守下同シ、

右御届之通、是迄湛居候水、當月十三日未之中刻々山鳴致し、水拔出候に付、丹波島驛渡船場邊、七ツ時頃水押流し、川中島川北邊村々水災之事、

四月十三日七ツ時頃、水害調、

一村數三拾三ヶ村、

一民家流失八百拾軒程、

一同石砂泥入二千百三拾五軒程、

一流死人百人餘、

内 貳拾人、水押之場之人別、

八拾人餘、旅人并外に在々之人別、睨と不相分、

以上、

覺

一死人貳千八百六人、 地震災害にて、

改貳千八百三拾四人、

一怪我人九百貳拾五人、

改千百拾人、

一斃牛馬貳百拾四疋、

改馬貳百六拾四疋、  
牛六疋、

一潰家五千六百拾五軒、

改五千九百七拾七軒、

一半潰家貳千四百九拾三軒、

改貳千九百八拾軒餘、

改酒藏拾一ヶ所、

其外、堂、宮、并社倉藏、土藏、物置類、村方にて申立不分明に付相除、追て取調可申上候、

四月六日

改四月廿一日迄取調、

松代

一町家潰百三拾貳軒、

一半潰百拾壹軒、

一酒藏貳ヶ所、

一死人貳拾五人、

一怪我人拾九人、

以上、

御預所權室村田町組、

一潰家之上焼失五拾壹軒、

外八拾貳軒潰、借家、

一死人拾六人、

但焼殘居家、土藏四ヶ所、○コノ一行、前行  
ハ錯簡ナラン、

一權堂町七拾貳軒、

外借家百拾八軒、潰之上焼失、

一死人七拾六人、

一怪我人七拾人餘、

死人、九拾貳人、

以上、

善光寺領

四月十八日迄調、

一潰家其上焼失に付、軒數未知數、

一死人千三百人程、

一西町組死人三百二拾人、

、千六百二拾人、

出家拾五人、

内譯 男六百四拾四人、

女九百六拾一人、

小以



外死人貳千人餘、

右は、死人之儀は旅人にて、其所を尋來り相知申候分如此、其餘之儀、旅籠屋にて帳面焼失仕候に付、人數不知、

一潰家貳千三百四拾六軒、

内 五拾貳軒、潰之儘有之、

貳千貳百九拾四軒、潰之上焼失、

以上、

四月廿一日迄取調、

此度、越後、信濃、就大地震、從公儀御見分被仰付、被御出役、四月七日被仰付、同十日出立、

御勘定方

松村忠四郎

直井倉之助

御吟味方下役

柴田隼太郎

御普請方

佐藤陸三郎

四月八日、出立、

同

四月十日、出立、

同 友治郎

同

四月十日、出立、

小林大治郎

右人別、

以上、

私領分信州松代、去月廿四日夜、大地震以來之次第、追々先御届申上候處、城下を戌亥之方に當り、六七里程隔り候山中、水内郡伊折村、梅木村、念佛寺村、和佐尾村、椿峯村、上祖山村、地京原村、日影村、鬼無里村等に亘り候大姥山、虫倉嶺と申高山、同夜震動拔崩之始末、近頃漸々通路出來、見分爲仕候處、右九箇村之儀は、別而大災に御座候處、其内にも伊折村、和佐尾村、梅木村、地京原村、念佛寺村之五ヶ村、右山麓間近に而、念佛寺村之内平澤組、臥雲院組、梅木村之内城之越組、親澤組、地京原村之内藤澤組、横道組、伊折村之内大田組、高福寺組、横内組、荒木組、和佐尾村之内栗本組、都合拾壹組之内、民家七拾軒程、人別百九拾九人、馬三拾疋、無跡方土中に押埋、右組々多分之亡所に相成申候、且亦右村々近村之内にも、黒沼村之儀は、家數四拾四軒、人別六拾人、馬六疋、并山田中村之儀は、家數三拾九軒、人別七拾貳人、是亦跡形も無之、土中に押埋、亡所に相成候程之儀に付、間近之村

村、變地、潰家、死人、殊之外夥數御座候趣候へ共、未取調行届兼候、前條村々等は、里地と違ひ、村立耕地も山路隔り、高目に不似合地廣にて、物每手遠之上、總て平常も巖石重疊之邊を、一步通ひ同様之險路に御座候處、此度之大災にて、元之道形致滅却候故、當分巨細之見分行届間敷、如何にも歎ケ舗心痛之次第に付、最寄災害不甚候村方江相纏、救方夫々手當申付、是迄も追々御届申上候得共、右大姥山虫倉嶽麓之村變災、未曾有之次第は、就中、甚舗候に付、猶亦此段御届申上候、以上、

四月廿三日

御名

私領分信州更級郡鹿谷村、并日名村分地、松平丹波守領分境高地河と申山澤、當三月廿四日大地震以後、度々強震有之、追々山々拔崩、右澤水數ヶ所湛留候旨訴出候に付、早速見分差出し候處、水上之儀は、是が爲に通路差支候に付、早々切開方申付候得共、右鹿谷村之内、岩下組分地字大はんみ山拔崩、右澤水湛留候所、當時之水面方、高五間程、敷五拾間餘押埋、川下四町程相隔候日名村之内、租室組分地、一同拔崩、右澤敷貳町程、高六間程、押埋候に付、掘割方申付度候處、山奥嶮岨之道路、拔覆數ヶ所有之、漸々一步通ひ而罷越候次第、殊に巖石押埋候儀に有之、難行届、右押埋場所致破壊、一

時に押出し候節は、犀川江流出、山中筋川添村々は勿論、河中島邊之儀は、此程御届申上候通り、川防土堤不殘押流候儀に有之候へば、猶亦如何様之水害に及び可申哉難計、心痛仕、此上之手充、精々申付置候、且又右鹿谷村分地字荒間澤と申谷河江、同村之内字柳窪組之耕地崩出し、右谷川湛留、細流に候得共、數十日を経、右場所押破候はゞ、是亦不容易災害に可有之旨訴出候に付、早速見分差出し申候、猶委細之儀は、追々可申上候得共、尙亦先此段御届申上候、以上、

五月朔日

御名

先達而先御届申上候、私領分信州更級郡山平林村之内、岩倉山拔崩、犀川堰留之場所、四月十三日夕、一時に押破り、河中島一圓之洪水に相成候に付、川上は追々常水に茂相復可申哉に奉存候處、巖石多分殘候故、存之外不致滅水、今以常水方は五丈餘茂相湛居、河添村々地窪之場所は、居家、耕地共、水中に相成居、其上右河筋所々之山拔に而、不殘押埋候と相見、山中筋方河中島迄、一統川床高く相成、難澁之次第、且は先般先御届申上候同郡鹿谷村分地、松平丹波守領分境、高地河と申山澤、兩岸拔崩、澤水は湛留候に付、右埋み場所、深貳丈程爲掘割候得共、其以下に至候ては、掘割候に順、兩岸之(嵩カ)大石崩埋候故、何分掘割方不行届候處、追々水高相増、去月

廿八日朝、右掘割候場々水乗流付候得共、此上自然と一時に押破り、犀河へ押出し候節は、前條之通未水湛居候上之儀に付、猶亦右河邊村々、如何様之水害に及び可申哉、一統恐怖に罷在、心痛仕候、并右鹿谷村地内字荒間澤と申谷河へ、同村之内字柳窪組之耕地崩出、右谷河湛留之儀も、先般御届申上、其砌見分差出し候處、廣大之場所拔崩にて、迎も掘割手段無御座候、無據其儘差置候儀に御座候、且亦水内郡煤花河水上、同郡日影村之内、字岩下組地内、追々拔崩、居川筋三町程押埋、當時之水嵩、川上貳拾町、河幅四町、深さ拾丈程、水湛に相成、尤右河向鬼無里村河浦組居家九軒、水入に相成、尤巖石押埋候に付、最初々洩水も有之、其上此節窪候所は水乗候間、容易に押破候儀は有之間敷候得共、何共難計、然る時は犀川下筋江押出し、是亦如何様之水害に及可申哉、其外山澤追々拔崩、水湛候數十ヶ所有之、是以強雨等にて押破候節は、何れも犀河江押出し候儀にて、如何様之水害可有之茂難計、心痛至極奉存候、依之掘割方手配、精々申付置候得共、猶亦先御届申上候、以上、

六月七日

御名

高田御城内、御城下共、破損書上有増、

一高札場三拾壹ヶ所大破、

一町在潰家四百七拾七軒、

一同破家千五百四拾壹軒、

一土藏拾九ヶ所、

一同大破貳百四拾壹ヶ所、

一鄉藏潰五ヶ所、

一寺潰三ヶ所、

一同大破拾ヶ所、

一死失五人、

一怪我人貳拾八人、

一死馬貳疋、

以上、

此外町在大破、數多不知、

飯山御城内、町、在、潰、燒失、荒増風説書、

一御城内多分潰、其上燒失、并に家中、同様に御座候、

一城下町之内、高札場壹ヶ所燒失、高札は外し置、

一竈五百四拾七軒、

一同三百貳拾九軒潰、

一内七軒、山崩にて泥冠、

一糶藏一ヶ所燒失、

一土藏百七拾七棟燒失、

一物置百四拾壹ヶ所燒失、

一水車屋三ヶ所潰、

一寺院拾五ヶ所潰、燒失、

一諸堂廿三ヶ所潰、燒失、

一城下町即死三百三人、

男百二十八人、

女百六十五人、

一在方高札場拾五ヶ所潰、

内三ヶ所、半潰、

一鄉藏三拾壹ヶ所、

拾壹ヶ所、山拔にて土中に埋、

九ヶ所潰、

内 五ヶ所半潰、

七ヶ所類燒、

一物置千貳百四拾八軒潰、

一水車屋三拾四ヶ所潰、

一社五拾九ヶ所潰、

一寺院拾七ヶ所潰、

一死人千百廿一人、

一死馬貳百三拾四疋、

一死牛三疋、

以上、

私支配所信州水内郡善光寺、先月廿四日夜亥刻過、大地震にて、寺内、并同寺家來居家、町家、震潰候上、出火に付、死失人、其外在家震潰、壓死人等之覺、

一本堂、

右内陣向造作等、大破、

(山カ) 一三門、

一經藏、

右貳ヶ所、小破、

一鐘樓、

右無事、

一如來御詰所、

一同御供所、

一同御歳宮、

一同境内秋葉社、

右四ヶ所、潰、

一二王門、

一境内熊野諏訪兩社、

右燒失、

一大勸進方、

萬善堂、

內佛殿、

右七ヶ所、大破、

護摩堂、  
(客カ)  
宮殿、

聖天堂、  
座敷居間向、

一同臺所向、

土藏六ヶ所、

物見、

裏門、

右潰、

一同土藏壹ヶ所、

右燒失、

一大本願方、

右不殘燒失、

一寺中四拾六坊、

一大本願役人

三軒、

一大勸進役人

五軒、

右不殘燒失、

一大勸進役人

貳軒、

右潰、

一寺領内

淨土宗寬慶寺、

淨土真宗康樂寺、

右不殘燒失、

一同

淨土宗西方寺、

右本堂無事、座敷、勝手向潰、

一同

聖師庵、

寬喜庵、

虎石庵、

右不殘燒失、

一同

武井社、

右燒失、

一同

湯福祉、

右潰、

一大勸進大本願家來、并門前町家、其外八町之内、二千百九

拾四軒、

右燒失、

一同百四拾貳軒、

右不潰家、

一同百五拾六軒、

右潰候而已にて、不燒家、

一寺領内、箱清水村之内、三拾五軒、

右潰家、

一九拾貳人、

内僧拾五人、男三拾七人、女四拾人、

右寺中并大勸進家來之内、死失之人數、

一四拾六人、

内男拾七人、女貳拾九人、

右大本願家來之内、死失人數、

一千貳百七拾五人、

内 男六百七人、女六百六拾八人、

右町家死失之人數、

一四拾四人、

内 男拾七人、女貳拾七人、

右大本願門前、并町家死失之人數、

一千貳拾九人、

右寺中并宿坊止宿旅人、死失人數凡、但右之外旅籠屋、

家内不殘死失之者も有之、止宿生死不相知候、

一寺領内

機多  
非人之内、三拾五軒、

右燒失、

一斃牛馬等、一切無御座候、

一怪我人、少々之疵所有之候者、多分御座候得共、家業差支

候程之儀には無御座候、

右之通御座候、此段御届申上候、以上、

四月

真田信濃守

一毘沙門堂、

右潰、

一同所未社、 愛染堂、

稻荷社、

御供所、

右三ヶ所潰、

一同所水茶屋貳軒

内壹軒燒失、

私御代官所、當分御預所、信州村々之内、去月廿四日大地震

にて、溜池、堤、震崩切所出來、水下之村々、田畑押堀砂入、又

は山崩にて、損地出來候由、訴出申候、委細之儀は、見分之上

可申上候得共、先此段御届申上候、以上、

信濃國埴科郡中之條

御代官

未 四月

川上金吾助

信州村々、大地震潰家、并流失家、御届書之覺、

總家數貳千三拾五軒之内、

一潰家并流失家五百四拾九軒、

埴科郡  
信州杭瀬下村、  
外廿六ヶ所、

外 土藏四拾三ヶ所

潰、  
物置百八拾六軒

但高札場、貯穀、別條無御座候、

總家數百廿五軒之内、潰家貳軒、 埴科郡杭瀬下村、

同四拾貳軒之内、潰家三拾四軒、 水内郡中宿村、

同九拾貳軒之内、同六軒、 埴科郡新田村、

同三百壹軒之内、同三軒、 同郡下戸倉村、

- 同貳拾軒之内、同五軒、
- 同百拾六軒之内、同九拾三軒、
- 同五拾九軒之内、同五拾八軒、
- 同七拾四軒之内、同壹軒、
- 同五拾壹軒之内、同七軒、
- 同九拾貳軒之内、同八拾四軒、
- 同六拾三軒之内、同五拾五軒、
- 同四拾九軒之内、同三拾九軒、
- 同百拾五軒之内、同百拾壹軒、
- 同五拾壹軒之内、同四軒、
- 同貳拾六軒之内、同拾七軒、
- 同八拾壹軒之内、同四軒、
- 同三拾七軒之内、同四軒、
- 同九拾九軒之内、同貳軒、
- 同百三拾九軒之内、同壹軒、
- 同三拾七軒之内、同六軒、
- 同百八軒之内、同五軒、
- 同五拾七軒之内、同壹軒、
- 同四拾八軒之内、同壹軒、
- 同七拾壹軒之内、同貳軒、
- 更級郡今里村、
- 水内郡上駒澤村、
- 同郡金箱村、
- 同郡千田村、
- 同郡荒木村、
- 同郡黒川村、
- 同郡黒川西組、
- 同郡新井村、
- 同郡富竹村、
- 同郡長沼上町、
- 同郡津野村、
- 同郡六地藏村、
- 同郡栗田町村、
- 同郡壹倉村、
- 同郡柏尾村、
- 同郡小見村、
- 同郡平林村、
- 同郡神戸村、
- 同郡坪山村、
- 同郡中村、

同五拾七軒之内、同壹軒、

同拾貳軒之内、同流失家貳軒、

同拾四軒之内、同壹軒、

同郡關澤村、

水内郡笹澤村、

同郡上ノ池原村、

右者、追々御届申上候通、信濃國大地震に付、御代官所、同國  
 埴科郡杭瀬下村外廿六ヶ村、潰家并流家等有之由訴出候間、  
 手代差遣見分吟味爲仕候處、去月廿四日夜四ツ時頃、稀代之  
 大地震にて、銘々居宅立去可申と一同立騷候得共、如何にも  
 強き地震、歩行難相成、家別に死人、怪我人夥敷有之次第、其  
 外溜池、堤、ゆり崩、湛水致し、又は山崩有之、泥水押出し、書  
 面之家數、一時に潰家、并流失家等相成候儀にて、右は全天  
 災難逢、悲歎罷在候と申立候趣、相違無御座候間、早速小屋  
 掛致し、農業に取掛り候様申渡候、尤右之外破損家も夥敷有  
 之、其外死人男女百八拾九人、馬貳疋、牛壹疋、其外怪我人御  
 座候、

右取調之趣は、牧野大和守殿江御届差出申候、依之此段御届  
 申上候、以上、

信州埴科郡中之條  
 御代官  
 川上金吾助

未四月

追々御届申上置候、信州村々大地震にて、私御代官所同國埴

震災豫防調查會報告第四十六號

乙

科郡杭瀬下村外廿六ヶ村、潰家相成候者之内、身元か成之者共、早速小屋掛致候間、銘々潰家取除、夫食取出し、農業手配致候得共、困窮にて漸營罷在候者、又は極貧にて其日を送り兼候程之者共は、中々小屋掛手段も無之、第一夫食に差支、一家之内、常人共右潰家にて及死失、老人、幼少之子供而已、相殘候者共も有之、親類身寄之者も同様に成行、極難に陥り候者は、無餘儀村方江引取、手當致し罷在候得共、皆潰同様之村方は、右手當も不行届候、拜借物等相願候村々有之候旨、手代共、廻村先々申越候間、夫々糺之上、貯穀之内を以、男は粃四合、女并六拾歳以上、拾五歳以下江は、同貳合宛、日數廿日、又は三十日を限、貸渡方、當時取計中に御座候、追而右數御届申上候様可仕、其外小屋掛手當無之者共江は、私役所付永續備金、貧民備金等之内を以、夫々手當取計、爲相凌罷在候、尤溜池、堤切所、山拔、泥水押出し候て、田地損地に相成候村方は、起返方精々申諭候様可仕候得共、大造之入用相掛、難及自力、又は家作入用等に至迄、差支難儀致し候貧村は、一村相續方に抱り候間、右等之分は、追々取調、相伺候様可仕候得共、先前書極難爲相凌候取計方之儀、一通御届申上候、以上、

未四月

川上金吾助

御勘定所

信濃國大地震に而、犀川山崩之場所押切、并千曲川出水、先御届書、

追々御届申上置候、信濃國大地震にて、眞田信濃守領分、同國水内郡山中郷之内、犀川筋水内橋之下、平林村之内、岩倉山崩落、長八町程之場所、岩石犀川を塞ぎ、并川上湖水之如く、數日水湛有之候處、當月十三日夕七ツ時過、一時に押崩し、同川筋、千曲川共、洪水にて、川中島邊、一圓之水下に相成候間、最寄村方々注進致候間、支配所村々水防、并損亡村村救として、手代共召連、早速出張仕、委細之儀は、追々可申上候得共、先此段御届申上候、以上、

未四月(十四日)

川上金吾助

御勘定所

地震に付、脇往還、人馬繼立差支御届書、

信濃國埴科郡坂本宿、上戸倉宿、下戸倉宿は、善光寺邊方地震弱く、右三宿之内、下戸倉宿には潰家御座候得共、人馬繼立差支之儀は無御座候、且善光寺町は、凡九分通潰家に相成、其上焼失いたし、繼立差支候處、一體眞田信濃守領分、同國丹波島宿、犀川渡船出水之節は、同人領分同國矢代宿方、松代通り福島村江繼立、夫々千曲川船渡いたし、私支配所同



國長沼上町にて繼立、信濃守領分神代村江繼立候筈に付、地震以來は、善光寺通差支に付、右松代通にて都而通行有之、御領、私領共村々、餘程之潰家も有之、難澁には候得共、無滯繼立致候處、右地震にて、信濃守領分同國山中郷之内平林村<sup>イ枝郷</sup>拔欠、岩倉山崩落、犀川を塞、川上湖水之如く、數日水湛居候處、去月十三日、一時に崩流、洪水にて右上町は勿論、最寄助合相勤候御料、私領村々共、水押に相成、既に流失家有之次第に而、繼立差支、尤新瀉、佐渡宿繼御用狀、其外急御用にて通行有之候分は、少人足にて無滯繼立致罷在候得共、松代方福島迄之間、往還御用之外、諸家通行は差支申候、尤御用にて通行有之候共、多分之人足繼立差支申候、依之御届申上候、以上、

未五月

川上金吾助

御勘定所

追々御届申上候、去月廿四日夜、信濃國大地震にて、眞田信濃守領分、同國水内郡更級郡山中郷之内犀川筋、同郡平林村岩倉山崩落、長八町餘、岩石犀川を塞、川上湖水之如く、數日水湛居候場所、當月九日大雨有之、俄に水増、十一日方瀧之如く流出候處、十三日夕七ツ時頃、一時に押崩し候由にて、同川筋大洪水、千曲川も同様有之、川中島一圓、水下に相成候所、右川筋、私支配所村々之内、同郡今里村、并善光寺最

寄水内郡荒木村外三ヶ村は、田畑水押にて損地出來、民家も所に寄床上迄水入に相成、同郡長沼村と唱ひ候上町、外三ヶ村は、水當り強く、圍堤押切、田畑は勿論、民家共大體水下に相成、右村々流失家廿四五軒有之、其餘之民家も、家財諸道具押流し、大石土砂押込、田畑餘程之損地に相成、普請所は跡形茂無之、同郡并高井郡下郷と唱江候村之内、犬飼村低場之民家、床上迄も水入に相成、其外は格別之痛無之、田畑水入にて、少々宛損地出來候得共、都て支配所村々にて、溺死人、牛馬怪我等無御座候、且前書山崩之場所水落之様子は、凡三分貳程は押流、當時岩石而已相殘、其上川上所々にて崩所有之、總體に川底押埋、川中廣、水底不陸相成、村々之内には、未水中に有之候場所も御座候由、右相残り候三分貳程は、逆茂落切申間敷由、追々水引落、當十六日頃方は、大體平水に相成、川筋渡船差支無御座候、右川中島、并長沼邊水押之體、眞田信濃守領分、松平伊賀守領分、松平飛彈守知行所、堀長門守領分に、數ヶ所之亡村有之候由、其外千曲川筋は、亡村と申程之場所無之候得共、總體川筋村々は水押にて、餘程之痛、溺死人も多く御座候、<sup>(由脱カ)</sup>相聞候、依之申上候、以上、

未四月

川上金吾助

御勘定所

震災豫防調查報告第四十六號

乙

信州村々流失家御届書之覺、

一流失家廿四軒、總家數百九拾五軒之内、地震潰家共流失、

私當分御預所

流失家三軒、

信州水内郡

總家數五拾壹軒之内、  
外貳軒、地震潰家流失、

上町

同

流失家十四軒、

津野町

總家數貳拾六軒之内、  
外四軒、地震潰家流失、

同

流失家三軒、

六地藏村

總家數八拾壹軒之内、  
外拾貳軒、地震潰家流失、

同

流失家四軒、

栗田町村

總家數三拾七軒之内、  
外五軒、地震潰家流失、

尤此外人牛馬怪我等、一切無御座候、依之御届申上候、以上、

未四月

追々御届申上置候、信濃國大地震、追日靜には相成候得共、

今以震動不相止、支配所村々之内、埴科郡中之條村陣屋最寄は、格別之儀無之、水内郡善光寺最寄村々は、何れも皆潰同

様、死人夥敷、同郡并高井郡下郷村々は、格別之儀無之候得共、同郡小菅村、溜池堤より崩、出水致候、水内郡青倉山山拔にて、泥水押出し、流失家、溺死人有之、總體にては潰家五百四拾九軒、死失人百八拾九人、其餘破損家、怪我人等夥敷、小縣郡、佐久郡村々は、格別無御座候得共、最寄風聞相糺候所、善光寺町は、大體不殘ゆり崩候上、出火にて九分通燒失、此節開帳に付、諸國之參詣人、夥敷泊り合、死失五千人も有候由、風聞仕候間、此段先達而申上置、追々實否相糺候處、土地之者凡千四百人餘、參詣之者千人餘死失有之、尤本堂、山門は別條無之、本坊は燒失不致候得共、潰同様之由、眞田信濃守城下松代町は、凡三分通も潰家に相成、死失人も右に準じ、其外領分之内、里方七萬石程、川中島重に有之、同所は一圓潰家有之、死人夥敷、大體五分通之潰に御座候由、水内郡に山中と唱ひ、一郷三萬石程之場所候處、右村々、別而地震強く、山崩地裂、村毎に有之、潰家、死人も夥敷、一體之員數、未相別不申由、殊に同領分犀川水内橋之下平林村之内拔イ合、岩倉山人家諸共崩落、長さ八町程、岩石犀川を堰切、川上湖水之如く、川縁十五六ヶ村程、水下に相成、幅六七町、又は所に方十四五町、長さ六七里程水湛、未落水不致、水勢に方何時押切一時に亡村可相成も難計方、川下村々、何れも食物

を携、山手江逃登り、或は壹村不殘他所江立退候由、右領分總體にては、多分之損亡に可有之、松平伊賀守殿城下上田町は、地震弱く、潰家等も無之候得共、領分之内稻荷山村は、川中島に孕、上方々松本通善光寺邊江之往還に有之候處、別而

地震強く、民家皆潰、其上燒失致、土地之者、參詣之者共、凡五百人程之死失に御座候由、本多豊後守城下飯山町は、善光寺同様皆潰之上、不殘燒失、領分之内も潰家、死失夥敷、其上所々山崩等有之、損亡村々、多分御座候由、堀長門守在所高井郡須坂町邊、領分共、少々宛は潰家も有之候得共、多分之儀は無御座候由、松平丹波守城下松本邊、地震弱く、潰家も無之、領分遠村には、山崩、潰家も有之趣に御座候得共、都而此度之地震、信濃國水内郡根元と相見申候、山崩地裂夥敷、一村皆潰之場所所有之、高井郡、更級郡、埴科郡筋、筑摩、安曇五郡は、同様山崩、潰家等も有之候得共、先は枝葉之姿、其内には地脈に寄哉、所々強弱有之、小縣、佐久、諏訪、伊那四郡は、餘勢而已に相聞申候、尙犀川山崩にて堰切候場所は、此上水湛之模様、追々可申上候得共、此段申上置候、以上、

未四月十日

川上金吾助

御勘定所

先達而御届申上置候通、去月廿四日、信濃國大地震にて、私

御代官所埴科郡杭瀬下村外廿貳ヶ村、潰家五百軒餘、其外破損家夥敷有之趣、訴出申候、委細之儀は、見分之上可申上候得共、先此段御届申上候、以上、

未四月

川上金吾助

御勘定所

私御代官所、當分御預所、越後國頸城郡村々、當月廿四日夜四ツ時頃々地震強く、<sup>(數脱カ)</sup>度震返し有之、川浦陣屋、本陣、長屋向、<sup>(碎カ)</sup>柱<sup>(碎カ)</sup>摔け壁等落、同村并最寄村々、潰家等夥敷出來、即死、怪我人等有之由、遠方村々は、未届出不申候得共、先此段御届申上候、以上、

越後國頸城郡川浦

御代官

未三月廿五日

小笠原信助

御勘定所

一地震前、荒井宿山手之方字西之山、三夜鳴動いたし、見届立越候處、大池三ヶ所出來、深さ數十丈、

一三月廿四日夜、高田邊、難波山々大釜程之光物飛出申候、一松平淡路守參府途中、能生宿泊之節地震にて、廿三日より今滯留、頸城郡山谷村山間之家數拾八軒、人數六拾人有

之、山崩落、不殘石下之所に相成申候、  
右は此度大地震に付、大變之次第、書面之通御座候、以上、

越後國頸城郡川浦

御代官

小笠原信助

未四月

御勘定所

千曲川大洪水に付、先御届書、

當月四日再御届申上置候通、當二月廿四日夜大地震にて、犀川上眞田信濃守殿領分山平林村地内字虚空藏山拔崩、犀川江押出、川中を埋立、流水を塞候に付、其節々當月十三日迄日數廿日之間、川上村々、水開湛罷在候處、兼而心得方申渡置候、高木清左衛門支配所信州高井郡立ヶ鼻村渡船場渡守々、同日夜五ツ時注進申出候者、千曲川筋俄に出水之水先相見候處、暫時に相嵩、驚入申候、右は犀川押埋候場所、切破候儀にも可有之哉と申立候に付、不取敢清左衛門手代夫々手配、川通村々救手當爲相防○以上三字、地災撮要ハ、水防としてニ作レリ、差出し候處、間合も無之、陣屋許近邊村々迄、同水湛入、家居水下に相成、中野村之儀は地高き場所に付、別條無御座候、追々人牛馬共逃參り候儀に有之、且千曲川之儀は、同夜九ツ時頃迄、凡貳丈八

尺之丈に相成、川筋左右總越、内鄉村々共、田畑は勿論、家居水冠に相成、夜中之儀、水先眩と難見定、翌十四日曉六ツ時迄、凡三丈餘にて暫居候間、水嵩之重疊に可有之候、昨夜中々家居、諸道具、材木等夥敷流、右木品并藁屋根之上に取付繩り居候人民共、流參り候者夥敷有之候に付、死失、怪我人等多可有之、前代未聞之大洪水、然る處同日朝五ツ時頃、川表引口に相見、内水も少々づゝ引落候様子に有之、此上増減之程如何可有之哉、水災之趣、最寄村々も追々届出候付、支配所川附并内鄉村々共總體にて、多分之儀に可有之由、委細儀は追而可申上、清左衛門儀、此節水内郡赤沼村邊災害村村廻村中之處、川筋は勿論、往還共水下に相成、通路難相成、留主中之儀に付、不取敢此段留主居之者御届申上候、以上、

信州高井郡中野村

御代官高木清左衛門

元メ手附

小林甚右衛門イ左

未四月

御勘定所

○本文、信越地震記ニ據リ、本卷七頁ニ收メシモノト同文ナレド、異同アルヲ以テ重録シ、且地災撮要所載ノモノト對校シテ、其誤謬ヲ正セリ、

弘化四丁未年三月廿四日夜、大地震に付、松代領分、

山崩、川塞、潰壓死人、洪水溺死人等、左之通御座候、  
一埴科郡、壓死人貳拾八人、

內 男十人、  
女十八人、  
一高井郡、同三拾三人、

內 男十一人、  
女廿一人、  
一更級郡、同六百三拾四人、

內 男三百十三人、  
女三百廿一人、  
一水內郡、同千八百六拾五人、

內 男八百九十一人、  
女九百六十九人、  
〆 壓死人貳千五百六拾人、

內 男千貳百三十人、  
女千三百三十人、  
一山拔土中埋死骸不出分三百九人、  
〇三百十八人カ、然ラ  
ザレバ内譯誤アラシ、

僧八人、  
內 社家一人、  
男百五十一人、  
女百五十八人、

一松代町并町外、壓死人三十二人、  
內 男十一人、  
女廿一人、

總合二千八百九十二人、  
(五カ) 〇山拔壓死者ハ、  
總合ノ外ナリ、  
內 男千二百四十一人、  
女千三百五十一人、

一埴科郡、怪我人五人、  
內 男四人、  
女一人、

一更級郡、同二百一人、

內 男百十七人、  
女八十四人、  
一水內郡、同三百五十二人、

內 男百八十六人、  
女百六十六人、  
〆 五百五拾八人、

內 男三百七人、  
女二百五十一人、  
一町并町外、同二十七人、

內 男十七人、  
女十人、  
一同居家潰、百三十五軒、

一同半潰、百五軒、  
一同土藏潰、三十九ヶ所、

一同半潰、四十四ヶ所、  
一同物置潰、四十一ヶ所、

一同半潰、三十四ヶ所、  
一酒造藏、二棟、

一門口、二ヶ所、  
〆

四月十三日、洪水之節、  
一流死人女四人、  
一同女二人、  
更級郡上小島田村、  
同郡大塚西組、

一同男一人、同郡廣田村、

一同男二人、一同女三人、同郡上真島村、

一同女一人、同郡網島村、

一同女一人、同郡南原村、

一同女一人、同郡下氷鮑村、

一同女一人、高井郡福島村、

一同男一人、一同女一人、同郡福島新田、

一同男一人、一同女一人、川北中俣村、

一同女一人、同布野村、

○ノ數、前ト合ハズ、

内 男六人、女拾六人、

死失合貳千九百八拾四人、○合數、内ト合ハズ、

内 男千三百四拾壹人、女千五百六拾七人、

鄉藏 潰六拾軒、  
社倉 潰六拾軒、

内 六軒、山拔押埋、四拾九軒、潰、三軒、潰之上燒失、貳軒、潰之上流失、

同半潰四拾七軒、

内 四拾貳軒、半潰、貳軒、半潰之上水入、三軒、半潰之上流失、

同流失五軒、水入四軒、

酒造藏潰拾九軒、

内 拾四軒、潰、三軒、潰之上流失、貳軒、潰之上燒失、

同貳軒流失、

居家潰四千九百九拾壹軒、

貳百八拾八軒、山拔崩埋、貳百拾貳軒、潰之上燒失、五軒、潰之上水入、三拾七軒、潰之上水入、内 三千八百五軒、潰、九拾七軒、水入潰、五百四拾七軒、潰之上流失、

同燒失百拾壹軒、

同流失四百七拾壹軒、

同水入貳千七拾八軒、

右合七千六百五拾軒、半潰貳千三百貳拾壹軒、

潰、燒失、流失、半潰共、

合九千九百八拾壹軒、

土藏、物置、合六千三百八拾三軒、

水車、潰、燒失、流失共、百拾三軒、

斃馬三百三拾五疋、

内 六拾七疋、山拔埋、土中に成る、

斃牛貳疋、

未五月朔日

真田信濃守

私領内信濃國埴科郡、水内郡、更級郡、高井郡之内、千曲川、犀川、寛保二戌年洪水にて、城地破壊、領内荒所多罷成、其後明和二酉年、猶又洪水にて損亡夥敷、明和五年奉願、國役御普請被成下候以來、文政二辰年迄都合六ヶ度、國役御普請

被成下、漸相防罷在候處、同七年大満水にて、御普請所及大破候に付奉願、見分は有之候得共、折節萬石以上國役御普請被下間敷旨被仰出候に付、其以來、無據手普請にて相凌罷在候處、當未三月廿四日夜大地震にて、更級郡山平林村之内、宇岩倉山拔崩、犀川押埋、流水湛留、及數日候間水嵩貳拾丈餘相湛、川上數拾ヶ村、水中に相成候次第に付、堰留之場所押破候は、川下村々、如何様之變地出來可申哉難計、加之、右川筋山合々出口、水内郡小市村之上字眞神山拔崩、式八九分通押埋候に付、其儘差置候而は、聊之水にても川中島へ押込、大患相成候間、右掘取方、并年々普請仕置候川除土堤江石俵或は材木等積立、數千之人夫を以、精力を盡し、致普請候處、堰留之場所、先月十三日夕、一時に押破、小市村邊水嵩六丈四五尺にも及候次第にて、先年被成下候犀川筋御普請所は勿論、積年致丹精候川除類、并此度俄に急難爲防普請申付候場所迄、不殘押拂、民家流失夥敷、田畑押堀、或は大石土砂押入、石河原と相成、如何共致方無御座、心痛之至極に奉存候、○心痛以下、一句、永鑑雜誌ニハ、心痛至極御座候得共ニ作レリ、御料所、他領打交居候場所にて、用水井筋も悉皆損所有之候上、洪水にて犀川懸用水揚口總而致滅却、(用カ)田水は勿論、吞水にも差支候に付、川中島用水揚口急難除普請之儀は、先格之通、如何様にも自普請可申付

候得共、犀川、千曲川領内普請所、延長四萬八百四拾三間餘有之、莫太之普請所、自力に及兼、就中、丹波島宿之儀は、北國往還筋に候處、人家流失も多分有之、一宿不殘四五尺程之泥入、并北國脇往還川田、福島兩宿、是又丹波島宿同様之泥入にて、佐州御用等を始、往來之差支にも可相成、其外亡所に可相成程之村、數多有之、川除之分は、前條之通不殘押流候に付、兩岸之形を失、大石土砂押入候耕地、石河原と相變、川式と致混同、水行亂瀬に相成、此上少々之出水有之候ても、何れ江本瀬相向可申哉、領分は勿論、御料、他領共如何様之變地、損地も難計、尋常之普請にては、當座之防にも相成間敷、元來領内土地狹之上、永荒地多、尤明和度申上候節は、永荒所四萬石餘に御座候處、文政三辰年迄、度々國役御普請被成下候以來、多年水旱之損毛は有之候得共、追々手段を以取復、永荒高相減、當時貳萬三千石餘に相成、全御高恩と難有仕合奉存候處、此度之地震、洪水共、前代未聞之大變にて、明和度に彌増、永荒所にも可相成と歎息仕、右に付ては種々手段仕候得共、莫太之川除、實に自力に難及、當惑心痛仕候、併國役御普請之儀は、文政年中被仰出も御座候儀、○永鑑雜誌、處ニ作レリ、恐入候得共、未曾有之天災にて、前々國役御普請奉願候水患之類に無御座候、尤此度拜借金奉願、領内一統山里村々、災

震災豫防調査會報告第四十六號

乙

害輕重に寄、夫々手當筋取計、取續方可申付儀と奉存候處、猶又國役御普請奉願候は、重々奉恐入候得共、再度之大變災、殊に廣大○永鑑雜誌、莫太ニ作レリ之川除普請、迎も難及自力、必至と難澁仕候、御時節柄恐入候得共、前斷之仕合に付、享保以來被仰出之國役御普請之例に不抱、出格之御慈評を以、犀川兩岸、并右落合尻千曲川筋、何分にも御普請被成下候様奉願候、以上、

五月朔日

眞田信濃守

○コノ届書、原本脱寫アリ、今永鑑雜誌所載ノモノヲ以テ之ヲ補ヘリ、

越後、信濃兩國之儀、當三月二十四日夜四ツ時頃大地震にて、在町不殘大破損、所々皆潰、其上出火にて、可逃出間も無、夥敷壁にて被押、桁、梁に手足を被挾、泣叫び、親は子を助る事不能、子は親を助る事不能、忽燒亡いたし、稀には逃出候者も、頭上手足に數ヶ所疵請、山中谷間之村々は、震潰候上にて、山拔落掛り、忽家人馬共土中に押埋、野原田畑、堅横十文字に割、或は崩れ、泥砂吹出、苗代杯震立、泥冠不用立、家小屋一軒も無難は無之、引續晝夜七十八度も震動、猶又廿九日晝九ツ時頃、大地震有之、最初大破之分は、震潰、(寢食カ)武家在町共、居宅に住居致兼、家財取出し、廣場江立出、震喰をも不思、數日之事故、菰張いたし、農業稼、

他行不致、即今地中に陥り候心地にて、震候度毎、魂を飛し悲歎致、途方に暮、助合は扱置、銘々一分之置所を不辨罷在、漸四月二三日頃、地震遠除、尤日に兩三度、或は五六度も震候得共、先以治り候様子、右大震之内にも左之通、

一信州善光寺如來、當年居開帳にて、此節諸國參詣之男女、并諸商人入込群集致、大旅籠屋にては五六百人、小宿(起カ)には五七十人程も泊人有之候處、廿四日夜之地震にて趣立候間もなく震潰、如來堂、山門、大勸進屋舖相殘、其餘は寺中、町家共皆潰之上、直に所々出火致、泣叫聲、天地に響渡、暫時燒亡致、大宿々十人位、小宿々五七人づゝも逃出候迄にて、其餘死失人數、土地之もの凡三千人程、旅籠屋泊人三千人と申聞候、

一善光寺々四方江七八里之内、同様地震、町家等人家夥敷場所は出火にて、善光寺同斷之場所も有之趣相聞候、

一越後々善光寺通り之往來、荒町、牟禮兩宿之間、吉村と申所は家數百五六十も有之内之處(由カ)、潰家之上山崩掛り、人馬共過半土中に押埋、其外越後之山々谷間之村々も、右同斷土中に相成候分も有之由相聞候、

一信州千曲川は、越後信濃川之上にて大河に有之、右川上字



天狗岩山、虚空藏山、左右を拔崩、川中にて突合、川路を築止、流水押留、松本領、松代領、其外凡六萬石程之場所江湛水押開、此節迄に三四ヶ村、深淵に相成、以今何方江流相付候共不知、深場六七丈、猶三丈餘も増水に相成候(は脱カ)ては、元之河路江流付申間敷と申事にて、右場所は勿論、最寄領主を始、家中在町、不殘山上に野宿、空敷見居り候外、可致様無之趣相聞候、

但四月五日、信濃を越後江通路場所見届申者申條、其外高田町にて承り及候次第、左之通、

一地震之節、荒井宿山手之方字西之山、三夜鳴動致し、見届立越候處、大池三ヶ所新に出來、深さ數十丈、

一三月廿四日夜、高田近邊難波山を、大釜程之光物飛出、

一信州岩鼻之山、巖石往來江崩落、

一猿ヶ馬場稻荷山、以今鳴動、

一善光寺家數二千五百之内、町端小屋五六十軒程燒殘、

一本多豐後守城下飯山は、城崩、町方皆潰之上出火燒亡、壹

軒前、一人當ならでは残り人無之候、

一松平丹波守領分、崩所數ヶ所、城内破損、町方、右にて可考

辨、

一善光寺燒場、死骨山之如く、地震之節、二階を道之中江震

落候者數百人之死骸、今以燒居候、

一犀川山拔之所、掘割に取掛り居、人足無之、一日に貳尺程掘下、いまだ貳丈も高く、湛水四里四方も有之趣に候、

一松平淡路守、參府中途、能生宿泊之節、地震にて、以今滯留

一越後國頸城郡大谷村、山間にて家數十八軒、人數六十人有

之、山崩落、不殘上下亡所に相成申候、

右は此度大地震に付、大變之次第、書面之通御座候、以上、

越後國頸城郡川浦

御代官

小笠原信助

未四月

御勘定所

四月七日、御沙汰

御勘定

金貳枚

直井金之助

時服貳ツ宛

松村忠四郎

越後國、信濃國村々、地震に付、堤、川除、其外破損之場所、

仕立見分爲御用罷越候に付、被下之、

右於御祐筆部屋縁類、伊勢守申渡之、大岡主膳正侍座、

右御勘定

震災豫防調査報告第四十六號

乙

兩人

御朱印

御普請役

四月十九日、須坂泊、

小林大治郎

御證文 佐藤友治郎

〔禾木園雜記〕善光寺地震取調材料六冊ノ内、丙、  
文部省震災豫防調査會所藏

弘化四年未之三月廿四日夜五ツ半時頃と覺候、夕飯給、緩々寢間江引込、少々寢入初と存候頃、少々宛地震初り候儀は、東西は南東方、地震初り、次第に以手外大造に罷成、誠に天地くつ返す如くに而、居家之内、所々天井又は壁落し、誠に先年方も聞傳江も無之大地震に而、寢間手を合せ御念佛を唱候得共、次第々々に大造に地震搖候に付、是方外江逃出しが宜敷と存、寢間をおこと先江逃出、裏口三尺戸をこじはなし、外之葺簀垣破り、裏庭江逃出し、其跡方自分も右口方飛出し候而、三彌初おゆきと聲を掛候所聞付、土藏之二階方飛下り、かんでらへ火を付參り、子供貳人召連、右裏口方與兵衛は庭江逃出し申候、是方會村春之助殿妹、下女頼置おりつ、先江罷出、其跡當村病死仕小左衛門殿悴、下男頼置豊吉、逃出し、其跡方岡田村藤右衛門殿娘、子守に頼置おけさ、右三人、臺所之二階寢間に致居臥居候を、おこと之掛呼起候處

聞付、右裏口方逃出し申候、然所家内一同、一命不難に而罷在、難有事と存候、是往來罷出候處、隣家留藏殿居家潰れ、やねを少々破し穴あけ、其口方留藏妻おその、はだかに而逃出ながら、太助吳候様に聲掛、なき出し逃出申候、其穴方留藏、并母親おふさ、并子供貳人、連出し、是皆はだかに而罷在候、自分之内江參り、衣類無心及候間、右之者共江貸させ申候、其跡江長右衛門殿妻おみい殿、娘おとき召連、はだか漸々はい出候間、衣類無之候間と、無心に及候に付、貸させ、其夜中折々地震搖、誠甚難澁致申候、三彌初下男豊吉兩人に而、村内見舞候處、村内本潰貳拾四軒に而、半潰六拾九軒有之、其外、私宅は居家西北江かしがり、佛前ぬ上之壁落、又は茶之間内(い)より上之壁落、袋戸損じ、其外味噌藏貳間半貳間潰し、水油絞屋階下を落、三間半有之候土藏(い)階下貳間半之處落し、其外晒物屋階下貳間に六尺之處落し、其晒物屋中本柱三本程損じ、水油むろを東之方江かしげ損じ、又はかめ之上屋貳間三尺御座候處潰し、居家之内、臺所二階落し、南物置貳間三間半土藏作、やねは麥萱吹に候得共、南方江かしげ申候、味噌藏階下等は皆瓦に御座候、其外伊勢之介方は、居家表がわ本柱七八本、東方へ折、其上階下瓦に而出六尺程有之候落し、雪隠を南東江かしげ、晒物屋を南東江かしげ、本柱を折申

候、夫婦共、命は不難に而御座候、文平は居家之普請難致吳、<sup>(差)</sup>刺當り當村佐左衛門殿居家、借宅爲致候處、借宅内裏口壁落し、臺所表がわ出入口迄壁落し申候得共、夫婦、男子壹人、岡田村々子守相頼おふさと云女子共、命不難に御座候、其外宇兵衛方隱居家、伊兵衛方に而居家之内壁落、所々損じ候得共、一命は不難に而皆々相揃申候、然處其夜中は往還江罷出、家内一同あんどん江火を付置、折々兵仕木を打居申候處、村方見舞吳申候、其内夜明相成候に付、豊吉を五明村九平太殿方、岡田村忠重郎殿方へ見舞差遣し候處、兩家に而、地震に而は少々は家損じ候得共、不難に御座候と承り候に付、早々歸宅致申候、其内原村之者共五六人宛、往來通行致、相尋便承り候處、私村方は御村程には無御座候、所々少々は潰候得共、吉左衛門殿宅坏は、別條も無之と申候、乍去大地震嚴敷、山中邊にて山拔崩、犀川留候様承り、右に付、市村船渡不入、一向水行無之、誠減水致、川越候得共足少々許もぬれ不申様に、往來旅人承り候得ば、誠機眉惡敷、是方八幡村八幡様江參詣可致申通行致候間、其後往來旅人承り候處、誠に而御座候に付驚入、是方晒物屋庭江へすい（籠）を拵、朝飯煮、火は隣家留藏燒、早々にぎり飯を致、居宅前江持參爲致、隣留藏夫婦、母親、子供貳人召連、其外向長右衛門殿、妻おみい、娘おひで、

一同朝飯給候而、私家内片付、西山江逃出し相談致、早々出立致候、嘉右衛門殿庭を通行、西浦出候處、六左衛門殿、柳澤文左衛門殿方江差圖致吳候間、二ッ柳村中條組を通行、瀬原田村江掛り、右村山之登り口松林岸に而、少々晝休致、むすび持參致候を晝飯給候て、柳澤村文左衛門差出、猶又右場所出立致、柳澤村へ着致候處、文左衛門殿、裏山林之内小屋掛等致吳候處、私宅家内一同、留藏家内一同、<sup>(伊勢丸)</sup>太野之介殿家内一同、其外房吉殿も同道に而、向長右衛門殿娘おひで、同人孫おはる、おふい、一同罷越、右文左衛門殿世話に相成申候儀は、同廿五日夜小屋に泊り候處、八ッ時々殊之外南風繁く吹出し、暮時々雨降出し、夜中降申候得共、翌同廿六日晝時頃、長右衛門殿娘おひで、孫おはる、おふひ、瀬原田村江母殿參り居候間行度と申候間、柳澤村之誰殿御子息に御座候哉、私相頼、右村方へ案内致吳、相下り申候、其跡江八ッ時頃、長右衛門殿、佐左衛門殿悴下男相頼九藏と申、其外善光寺近邊方下男相頼置候と、ちんを召連、私共尋參り、文左衛門殿方之世話相成、廿六日夜、右小屋に泊り居、翌廿七日朝、早々に朝飯給、長右衛門殿、下男貳人ちんを召連、瀬原田村江罷越と申、文左衛門殿小屋之内を下り申候、右長右衛門殿は、娘初、長右衛門殿、下男貳人ちん共に、<sup>(食)</sup>喰時等は一向持參不致、自分米を

喰居候、同廿六日、猶又北風吹出し、繁く御座候故、善光寺内、上後町邊出火に而、大門西町、或は坊主樓小路東町權堂邊か、越後かへ道吉田近邊迄、同廿四日夜々、同廿六日、同廿七日迄燒申候、稻荷山村、同斷之事に御座候、稻荷山村燒失人、凡五百人程、善光寺燒失人、地震變死人共、凡千五百人程死申候風聞御座候、廿四日大地震搖潰に付、瀬原田村商雲寺燒失、篠野井村かしや清兵衛火元に而、隣家壹軒、貳軒燒失致候、其外は當村に而も、又は近村に而も、神佛之方便に御座候哉、出火無御座候、當村に地震搖、居家潰下に相成變死人は、彌茂八殿妻おつま殿、源助殿男子三ツ位な壹人、當村長助殿姉、原村江先年縁付參り候處、同人方へ振舞に參り臥居候處、長助殿居家潰、其上同人土藏、居家並作置、西之方に有之候、右居家上江押懸候故、掘出相成不申候間、變死致候、其外は變死人無之候儀は、當村鎮守八幡宮御普請、弘化三年十月中か相初り候に付、大工棟梁、下横田村與惣左衛門殿、其外弟子大工、下大工共拾三四人程罷越居、當三月中、引續御普請致居候に付、右大工棟梁初其外共、村内立働、且又潰家之壁、或は財木等之下に相成候者共、のこぎりまさかりに而切落し、脇江寄、男女小供迄も出し吳申候、是所鎮守様御影と奉仰候、當村宮社地之内、建置金比羅様、寶昌寺、香福寺本

堂、其外橋塲田地藏尊、香福寺六地藏尊、自分共石塔布施、高田村分地宮入一統持文珠様、同社地之内金比羅様、南原村蓮香寺居間向等、地震搖潰申候、其外筆紙難盡候、柳澤村文左衛門殿、裏山林之内小屋懸に泊り候儀は、三月廿五日晚々、同廿六日、同廿七日、三夜泊り申候、同廿八日晝時頃、治兵衛、三彌、豐吉三人に而、宿を見廻り罷下り候、跡かおこと、おゆき、子供貳人、下女おりつ、小もりおけさ、一同柳澤村を出立致相下り歸宅致候に付、右に付相談致、猶又二ツ柳村方田組茂右衛門所持山林之内、當村與兵衛殿、嘉右衛門殿、與惣治殿も罷越居、其隣幸治郎殿、入左衛門殿、龜藏殿、小屋之内相頼、其夜は泊り居候處、甚だ手せまに而、夜中能は不寢居申候、翌廿九日四ツ時頃、同組長右衛門殿薪物屋を、篠野井村岩重殿借宅致居候間、其内を長右衛門殿江無心に及、又又岩重殿無心申候而借宅致居候、春中拵置候糶壹枚、翌晦日朝、手土産と申遣し申候、其翌日四月朔日、朝飯後八幡村八幡宮江、治兵衛參詣致申候、其後は本綿仕付置候得共、土を懸不申候間、木綿土懸に家内之者當村江罷越、おこと許り留主居差置候而、日暮又は暮時出宅致、右方田組之長右衛門殿薪物屋江、おこと許に御座候間、治兵衛罷越候而、翌朝日々歸村致、作之手傳致候、同七日晝後か申候、同十一日朝七ツ

(二カ)

(曇)

時頃、雨降出し、翌十六日五ツ時頃迄雨降續申候、是方雲り居、同十三日、同十四日、雨降申候、誠に少々宛降り迷惑致候、殊之外不順御座候、同十五日方天氣罷成、同十六日明七ツ時頃、地震搖申候、同十七日九ツ時頃、少々許搖申候、同廿二日晝七ツ時過、地震搖候、同夜八ツ時頃、餘程兩度搖申候、同五ツ時頃搖申候、六月朔日九ツ時頃、猶又少々宛貳度搖申候、同六日明六ツ時頃搖申候、同七日暮六ツ時頃搖申候、同十二日明七ツ時頃、貳度搖申候、同十三日五ツ半時頃、如雷鳴申候、此節少々許に御座候、同廿九日九ツ時頃、地震搖申候、同廿六日晚方、同廿九日夜迄、夜がらす啼申候、七月二日晝申上刻頃、地震續而三度搖申候、尤後之地震は、餘程搖申候、同夜九ツ時頃、猶又餘程地震搖申候、同十日暮六ツ時頃、餘程搖申候、其後地之下に而啼申候、同夜五ツ時頃、猶又餘程搖申候、又々地之下に而三度啼申候、同廿一日早朝明六ツ時頃、餘程地震壹度搖申候、同廿四日晝九ツ時頃、同晚五ツ時頃、其後折々觸申候て、翌廿五日明七ツ時頃、又々搖申候、(魁カ)早冠にて御座候、六月十六日朝、雨少々許降申候て、其後一向雨之き無之、同廿八日、少々白雨有之候得共、直に晴申候、七月九日夕飯後、猶又少々許白雨有之、同十三日晚、猶又白雨有之、同十四日、同十五日、白雨の催致候得共、雨は一向降

(而カ)

不申候、續々天氣宜敷御座候、同廿五日、大造成南風吹出し、諸木枝折候様御座候而白雨有之候、其後又々天氣續而宜敷御座候、同晦日九ツ時頃、貳度地震搖申候、八月朔日五ツ時頃、同三日九ツ時頃、猶又搖申候、同廿八日方少々宛南風吹申候、八月二日迄吹申候、同三日、風氣一向無御座、天氣晴天にて殘暑續難凌候程、上天氣に御座候、同十六日九ツ半時頃、猶又地震搖申候、同十五日八ツ時頃迄、天氣宜敷御座候處、右時分方雨少々宛降申候、七ツ時頃晴申候、同夜九ツ時頃、猶又雨降申候、誠少々許御座候而、翌十六日明七ツ時晴、天氣御座候、同九ツ半時頃、又候雨少々降申候、同十七日八ツ時頃、白雨如く雨降申候、翌十九日五ツ時頃方、晴天相成申候、同廿日八ツ時頃、地震搖申候、晴天に御座候、同廿二日七ツ時頃、猶又地震搖申候、晴天に御座候、同夜八ツ時頃雨降出、明六ツ時頃晴申候、天氣宜敷御座候處、九ツ時頃、又候雨少々降申候、間もなく晴申候、八月廿七日七ツ時頃、九月朔日四ツ時頃、貳度、同十日五ツ時頃、壹度、(搖申候脱カ)同十日夜、雨大降に而夜中降申候而、同十一日五ツ時頃晴申候、同十二日明六ツ時方大雨に而、一日降續申候處、暮時頃晴申候、夫々天氣に而御座候、同十七日、十八日、降續申候、夫々同十九日、天氣に而御座候、同廿四日四ツ時頃、貳度地震搖申候、同廿五日夜七

ツ時頃、猶又地震搖申候、同廿六日暮六ツ時頃、雨降出し、  
 其夜中降續、同廿七日迄、十月七日夜七ツ時頃、同八日九ツ  
(降申候脱カ)  
 時頃、同九日暮時頃、夕飯後追々五ツ時頃、同十日夜七ツ時  
 頃、地震搖申候、同十二日夜八ツ時頃、地震搖申候、同十五日  
 夜五ツ時頃、地震搖申候、同十九日五ツ時頃、雪降出し、七ツ  
 時迄降續申候、九月廿四日、秋土用入申候處、霜降不申候而、  
 追々土用明前、十月九日朝、少々許霜降申候、夫々三日程霜  
 降續候、同廿日夜八ツ時頃、猶又地震搖申候、同十九日七ツ  
 時、天氣相成、同廿日、同廿一日、晴天にて御座候、同廿五日  
 夜、壹度、同廿六日晝四ツ時頃、折々地震搖申候、同晦日晝五  
 ツ半時過頃、少々地震搖申候、同夜明七ツ時頃、貳度地震搖  
 申候、同廿九日夕飯給居候時、暮六ツ時頃、少々搖申候、同七  
 日七ツ半時過頃、地震搖申候、同十四日朝五ツ時頃、猶又地  
(日脱カ)  
 震搖申候、十月十日頃、十一月十四迄、晴天に而御座候、尤  
 十四日朝、南風吹出し候得共、天氣は宜敷御座候、○中  
 同十四日夜夕飯時、白雨之如く雨降出し、夜中降申候、翌  
 十五日朝晴申候、是、猶又天氣宜敷、同廿五日迄も宜敷御座  
 候、同廿四日夕七ツ時頃、地震搖申候、同夜九ツ時頃、猶又  
 地震搖申候、同廿九日夕、雪少々降申候、同廿六日夕飯過頃、  
 地震搖申候、十二月二日夜七ツ時頃、猶又地震搖申候、天氣

は續而晴天に而御座候、同十二日、天氣續而宜敷御座候、同十  
(三カ)  
 二日四ツ半時頃、地震搖申候、同十四日迄天氣續、同夜四ツ  
 時頃、雪降申候、同夜四ツ時頃、地震搖申候、同十五日夜九  
 ツ時頃、三度、同十七日八ツ時頃、地震搖申候、同廿九日九ツ  
(申カ)  
 半時頃、三度搖申候、酉之正月三日夜八ツ時頃、呼程地震搖  
 申候、同六日四ツ時頃、壹度地震搖申候、同八日夜、大造成地  
 震搖申候、度々御座候、同十二日夜四ツ時頃、造應之地震搖  
(相)  
 申候、壹度切に御座候、同十四日暮六ツ時、呼程地震壹度搖  
 申候、同廿二日四ツ時頃、同廿三日五ツ時頃、同廿四日明六  
 ツ時頃、地震搖申候、三月十八日明六ツ時頃、呼程地震搖に而  
 外に逃出し申候、同四ツ時頃、折々五六度搖申候、其夜八ツ  
 時頃、同十九日朝、南風吹出し、其夜少々宛雨降出  
 し、夜中小降雨に而降、同廿日朝晴候而も南風不止元之如く  
(魁カ)  
 吹、五ツ時頃、少々宛天氣相成候、其、打續早冠に而、四月  
 十六日、天道様御月様御上り、誠赤く相成御上り被遊、同十  
 九日五ツ時過、呼程地震搖申候、南風吹出し、翌廿日、一日  
 吹申候、同廿四日明六ツ時、小降雨に而、晝時過頃迄降續申  
 候處、夫々晴天相成申候、同夜四ツ半時過頃、呼程之地震搖  
 申候、猶又同廿五日明七ツ時頃、小降雨にて降出し、五ツ時  
 過頃迄降續申候、同廿六日夜八ツ時頃、同廿九日八ツ時頃、

地震搖申候、四月七日暮六ツ時夕飯頃、如雷鳴候て地震搖申候、夫々南風吹出し、翌八日迄吹申候、天氣は四ツ時頃方晴、暖に御座候、四月九日夜九ツ時頃、三度地震搖申候、同十日五ツ時頃、猶又地震搖申候、是方續而晴明(朝カ)に御座候得共、同十二日南風吹出し、晝後方雨少々宛降續、同十三日猶又少々宛降申候處、八ツ時又白雨御座候而、雷啼申候、五月六日明六ツ半時頃、地震搖申候處、是方雨降出し申候、一日降續申候、同十八日朝五ツ半時過頃、猶又地震搖申候處、翌十八日明七ツ時頃方雨降出し、暮時頃迄降續申候而、同廿日晴天に而御座候、猶又翌廿一日明六ツ時頃、地震搖申候處、南風繁く不勝天氣に而御座候、同廿五日晝八ツ時頃搖申候、五月廿五日五ツ半時頃方雨降出し、日々南風吹出し候而雲(曇)り居、雨は時晴致候而は折々降申候處、六月朔日四ツ時頃迄雨降晴候而、世間一統人氣惡敷、穀等穀屋共引メ候に付、買給候者共、其間難澁致候、然處六月朔日四ツ時過方天氣宜敷、誠に晴天に而五月晦日方土用に入申候處、天氣相成候間、世間之者共大悅致候、暑中誠に大暑に而、難凌程之大暑に而御座候、同四日夕飯頃、貳度地震搖申候、同五日四ツ時頃、地震搖申候、大暑は七日迄上々天氣有之候、同八日、南方方白雨降出し、東方江廻り、北風が南風に相成、夕飯時分方降出し、夜中少々

宛降申候、同九日明六ツ時頃迄降申候、夫々天氣宜敷相成申候、然處同八日は、以手外冷氣趣、袷袷着候程冷氣相成、難澁仕候、同九日四ツ時頃迄、冷氣に而有之候、夫々天氣相成候、同八日夜四ツ半時頃方、相應之地震貳度搖申候、夫々冷氣様子に而御座候、同十四日四ツ半時頃、如雷鳴地震搖申候、天氣は暑中引續宜敷御座候、同十七日六ツ半時頃方小雨降に而、四ツ時頃迄降申候處、夫々晴申候、天氣宜敷相成候處、七ツ時過方、猶又雨降出し白雨に而、夕飯頃迄降申候而、夫々晴申候、同十八日天氣宜敷御座候、同廿一日夜九ツ時頃、少々地震搖申候、同廿二日晝九ツ時頃、猶又、○以下、原本ニ缺ケタリ、

御公儀御役人様地震場御見分に付、水泊り押切之場御越被遊、明細書寫、

- 一 居家拾貳軒流失、 下大岡村、
- 一 居家四軒流失、 下大岡村、同組安川組、
- 一 同四拾軒許同斷、 同組川口村、
- 一 居家不殘流失、 和田村、
- 一 日名村之内、橋木組、千厚組、不殘流失、
- 一 大原村本郷、大方流、此邊方下續、今以水湛に相成候、
- 一 里穗荊村、土藏五ツ棟程、相見へ不申候、
- 一 新町村、土藏貳拾棟許残り申候、其外不殘流失、

一竹房村平之分、大方流失、

一上條村雲草寺、安養寺、并町組、不殘流失、

一水内村之内舞臺組、吉原村之内橋場前、不殘流失、

一水内村之内平組、不殘流失、

一三水村本郷、不殘流失、

一氷熊村平組、五軒流失、

是方水湛上續之分、

一安庭村本郷、壹軒流失、新木組、貳軒流失、

一二ノ湛向側、長井村之内船場組、江見組、不殘流失、

一笹平村水主、并穢多、不殘流失、

一瀬脇村之内本郷、并飯盛組、居家壹軒残り、其外流失、

一下宮尾村之内保玉組、不殘流失、

一山村山村本郷、不殘流失、荒神堂迄流失、

一水湛、松本領雲跡と申處迄、

御公役様御見分之節、下書寫、

一御家中家潰、三拾八軒、

内

侍家、

八軒、

步士家、

拾三軒、

足輕、仲間家、

拾七軒、

御城下町、

一壓死人貳拾五人之内、男拾三人、女拾貳人、

一怪我人貳拾七人之内、男拾三人、女拾四人、

御領分、

一高三萬貳千八百五石餘、

本新田、

内

壹萬八拾五石餘、

田方、

貳萬貳千七百貳拾石餘、

畑方、

御領分村々、

一民家潰七千六百七拾貳軒、

内

四拾九軒、

燒失、

貳百軒、

燒失之上、湛水入、

六百軒、

湛水に而浮出、

三百軒、

山拔、土中江埋、

六千五百拾七軒、

家潰、

一壓死人貳千七百七拾五人、

治定難申上候、

内

社家壹人、

僧拾壹人、

男千貳百貳拾貳人、

女千五百四拾貳人、



但此内三百四拾六人、山拔、土中江埋、死骸知不申候、  
一穢多七拾八人、

内六拾七人、山拔、土中江埋、死骸知不申候、  
一斃牛馬貳百六拾七疋、

内六疋、山拔、土中江埋、死骸知不申候、  
三月廿三日暮時、名主繁治殿廻文狀寫、

廻文、役本名々様江御披露仕候、然ば此程中御觸面、頂戴仕、  
右御文言、左之通、

去未年變災に付、壓死溺死之者共、御不便に被思召、來る  
廿四日、岩野村於妻女山、爲亡靈供養、大施我鬼執行、御善  
提所長國寺江被仰付候、其旨相心得、致參詣度者は、勝手  
次第者也、

三月

竹村金吾 印

三月廿三日出す、

五役人中

頭立中

小前總代中

此廻文狀、名主繁治殿名面は無之に而、銘々披見之上、  
自分に而順達致候様に候間、總代與兵衛殿方順達致候、  
同廿三日夕飯時頃、

三月廿三日出之手紙、水内村追譯組(分)こま殿ら差被遣候  
手紙、

三月廿五日暮時雨降出し、同八日一日降申候間、犀川留所押  
拂候哉と存驚、家内一同、右小屋之内江逃行申候、翌九日  
天氣相成候處、同十日、土尻川留所押切申候而、犀川近邊村  
村難澁致候、同十一日、方田組小屋方、治兵衛、おこま、與兵衛  
殿、おみか殿、平治殿、助治郎殿、山中筋地震に而山拔山崩、  
犀川水湛等之見分參り候處、岩倉邊方上續新村、水内村、  
三水村、吉原村、致見分候、猶又方田山小屋江歸り申候、其夜  
泊り、翌十二日朝、當村江歸村致候、作物耕作致候、尤三月廿  
八日夜、方田山小屋之内に泊り居候處、夕飯後五ツ時頃、高  
聲に而當村澁田沖邊方聲懸、犀川留所押切申候と申、次第に  
聲近く相成候間、小屋之内之者共一同驚、覺悟相極居支度等  
致居候處、呼り候者は誰成候哉と見れば、當村八百吉殿御子  
息佐兵衛殿に御座候、右様子承り候得ば、犀川除御普請人足  
に參り、右様を承り候間、是太助にも相成儀に付、早速歸村  
致、是迄罷越、名々方江相知度と申、其上犀川除御普請、其外  
品々の様子物語致居候處、二ッ柳村方田組茂右衛門殿方假  
役元に而、其高聲聞付、早く兵仕木を打、所々騒立申候、然處  
二ッ柳村役元方、當村佐兵衛殿に委細承り度御座候と、同村

## 震災豫防調査報告第四十六號

乙

作五右衛門弟、其外茂右衛門殿別家兩人に而、山之小屋之内江被參候處、當村佐兵衛、小屋之内を逃去、聊相知れ不申、是いつわり之様に見受、慈悲當人見付差出し候様に、所々詮議有之候得共、相知不申、無據兩親か又は親類之内成、當村役元江罷越候處、(様カ)度々使者被遣候間、無餘儀母親參り候處、右様子不相分に付、小屋之内歸り、其次親類某儀參り候處、是以右様子も不相分、其跡江八左衛門、幸治郎兩人に而親類に而、猶又參り候得共、右様子不相分、其儘差置候處、時刻其内相延候内、二ッ柳村組頭賢吾殿、犀川御普請出役に而歸村被致、役元江被寄、犀川様子、其外水押切候風聞、小松原村近邊か下續一同咄有之候、殊に御上様に而御出役被遊候御方様、御逃被遊候様子に而、右組頭賢吾殿、御咄役元に而被致候間、うたうりはれ申候間、當村佐兵衛に、何にも二ッ柳村役元に而尋は無御座候、四月十三日朝飯後、向長右衛門殿方、治兵衛地震漬片付に手傳參り、二間半、六間之土藏の瓦、又は土材木等片付申候、人別は愛之介、下横田村庄之助殿御子息福松殿忤兩人に而、晝飯持に而手傳に被參候、其外長右衛門殿家内之者、一同に而取片付致、晝飯は愛之介殿宅に而被下候は、挽わり麥許、飯に燒候而被出候、猶又晝飯後取片付參り候處、八ッ時頃、西之方に而大造成物音致候間、往來江罷

出能々承り候處、犀川留押切、水湛た(と衝カ)きに相成物音と存候間、誠に機尾惡敷存候得共、開取片付致居候處、七ッ時(氣味)々次第右音下續江下り音致、次第近く相成、七ッ半時々右片付仕舞、音承り候得共、次第々々に下續下り、無間茂小松原村犀川(犀川口)、江水押參り候様子に而御座候間、治兵衛も早速歸宅コトナリ、家内之者江申聞、方田山小屋を差而逃出、西浦罷出候處、當村組頭長四郎殿、犀川口出役に而參り、右場所を逃參り、小市道社宮司沖々聲懸、水留所押切候間、村中之者壹人茂不殘皆逃去と、大聲に而申候間、早々逃出、方田山小屋之内に參り候は、入相時分に御座候、自分宅に而も、おことは方田山小屋に地震之時分歸宅被致罷居候、右時節治兵衛初め飛出、其次におよき、子供兩人、下女おりつにおしゆんをおぶせ、子守おけさに小兒二ッ治おぶせ飛出させ、三彌、下男豊吉は、跡を追々に而水を見届て參り、方田山小屋江相揃候は、自家内一同、伊勢之介夫婦、文平夫婦に小兒重治を子守おぶせにおぶせ、龜藏母親に弟介治郎、メ拾八人に而其夜小屋に泊り申候、尤其夜夕飯過時、二ッ柳村木橋迄、水見に治兵衛、三彌、豊吉、龜藏、伊勢之介、文平、右人數參り候得共、夜中故不相分候間、早速小屋江歸り申候、其夜は信心第一に致、皆々機尾惡敷存、夜中有明に而、帶メ居覺悟致、夜明待居、翌十四

日夜明六ツ時、早々二ツ柳村と柳澤新田村境登高所に而水見分致候處、凡川中島は一面に水押來り、當村近邊は、今井村西を南原村江、水押水付、川敷は北原村を南原村と、境を川筋相立、下續落口會村東沖を小森村沖迄、川先に相成、壹筋は、今井村西を布施高田村西芝澤組南川敷に而、會村、西當村分地、五人寄合沖、佃沖、會西沖、池田沖、石塔沖、行野橋沖、細池沖、松島沖、横田沖、其外居家敷迄水押に而、居家之内貳尺位、又は壹尺八寸位水付、又は南方は貳尺七八寸を、穢多居家杯は三尺程も水付相成申候、水付無之沖は、社宮司沖、市野坪沖、四反田沖、中屋敷沖、澁田沖、内外西浦沖、水一向不通申候、其後十五日、方田山小屋を立歸村致、家内之者歸宅致候處、誠に地震搖潰、其後滿水に而泥入相成申候に付、ごころ手初致候哉と氣茂を潰、<sup>（わ）</sup>ごころはく致候、難澁に而罷在候、第一住居又は御田地開發、所々片付差問候各所、池田沖畑、口長地御座候處、家内五人に而二日半日程片付に而、漸大通に而有之候、

右に付、御上様に而本潰者、亦是半潰之者、爲御手充、 $\times$ 金貳拾九兩被下置候に付、難有頂戴仕、早速割合仕候處、本潰金貳分宛頂戴仕、半潰金壹分宛頂戴仕候、取續難有仕合奉存候、

犀口三堰水門は、御上様に而御普請御建被成下候、尤上堰

之儀は、水門を下續七拾間、堰並村々に而、人足出情普請可致候様被仰付候、右を上續七拾間は、御上様に而寄人足に而堀割御普請被成下候、小松原村分地段野原組、裏用水堀割水溜り土礫等は、當村役元を下ダ錢に而、人足壹人に付情次第、深さ壹尺壹坪、壹人前に而三百文、又は出情次第、五百文を六百貳拾四文位迄錢、出役人を受取申候、四月十六日、十七日、十八日三日之内、村々極難之者江、家内人別老若男女子供不抱、御飯むすび、壹人分四ツ宛被下置、其上十九日、廿日、廿一日三日之内、爲御救白米三合壹勺五才宛、猶又被下置、難有頂戴仕候、用堰堀割人足之儀、御領分山中村々、川南村々、川北村々、川中島村々不及申、鍵役男懸人足、拾五歳を六拾歳迄、用水堀割相濟、田方水引入候迄、出情被仰付候、然處苗代差支候に付、無據四月八日、下石川村平之丞殿後家ごの江、無心申入候處、御貸被下挨拶御座候に付、申談之上、悴文平爲土産しばり手拭壹筋持參、翌九日朝、右後家ごの方罷越借用申候處、右村砂溜り通り、上石川村馬道、南作見村懸り二道、右村砂溜り見通、田方小作入口表半程之處、苗代致、借用人別、文平、與惣治、與兵衛、嘉右衛門、自分、伊勢介、藤作七人に而、種子蒔は四月十八日、十九日、又は廿日、三日之内蒔入致候、<sup>（中）</sup>はんげんは五月廿日に而有之候得共、殊之外

震 災 豫 防 調 査 會 報 告 第 四 十 六 號

乙

用水堀割手間ごれ候間、五月つき末頃相成候得共、用水堰堀割致居候間、田方に相成候哉、亦是畑に相成候哉難計候に付、田方に大豆仕付、粟種蒔入候者も、間々有之候、田植之儀は六月三日頃を植初、五日、六日頃迄仕付、當村に而も、澁田沖邊は、六月九日朝迄植仕付致候、

流失之品、私宅江持參致置候に付、往來筋江建札致、尋參り候方へ渡度と存候處、小松原村久治郎殿母殿江渡品物は、本だんす壹ツ、但し桐板拵に而、早々本も有之候共相渡候、はた

き臺壹丁(挺)、とふみ壹ツ、同村勘兵衛殿江渡す、但し松木松板

に而拵品、其外萬石とふし壹ツ、同人江渡す、此分は瀧澤清左衛門と名面印有之候に付、其段當村頭立與三郎殿、假役人に而役元へ出役致居候に付、伺之上渡す、其外八寸膳拾人前、

但松板(太カ)に而箱入、同人名面印有之候に付、同村右郎右衛門殿

渡す、其外眞(ま)ね板貳枚、但柳木板に而、壹枚は足附有之候、此品當村久左衛門姉、先年同村之内縁付參り、其女中江相渡す、其外箱橋(躰子)壹丁、但し松板に而長貳間半、廣さ五尺程、同

村藤吉殿外壹人同道被致候に付、早速相渡す、是に而流失物渡し相濟申候、然處滿水に而、二ツ柳村方田組長右衛門殿、薪物屋及無心候御禮として、金貳朱に鼻紙壹束代貳匁四分

出し、三月廿九日、四月十五日朝迄假宅致居候間、爲御禮遣

し申候、其外糍壹枚代百貳拾四文品、其上手作夏大根五六本程、折々持參致、又は秋大根五六本、致持參遣し申候、柳澤新田村文左衛門殿方にも、家内之者逗留致、三月廿五日夜、廿六日、廿七日迄世話に相成候間、爲禮氷豆腐八れん致持參遣し申候、二ツ柳村方田組茂右衛門殿江白米壹俵半、挽割麥三斗五升程頼預け置候間、爲禮氷豆腐貳れん遣し申候、稻作仕付後に而、甚違作罷在候、五分六分位、又は七分位な者稀に而、木綿抔も甚違作に付、村方引方は田方拾俵地に付四割、木綿引方は秋毛三割、其中滿水に而水押水付畑は、壹割五分に而、御立相場三拾壹俵、御立直段村相場三拾貳俵に而御座候、尤大豆、粟、大角豆、赤大豆、蕎麥抔、宜敷御座候、菜、大根等違作に而、大根に甚にがみ有之候、大麥相場二十六七俵位、粳相場三拾貳三俵位、白米等小賣、百文に付壹升位、餅白米抔は九合位、挽割麥壹升三合位御座候、水油直段、大相場兩に壹斗貳升前後、百文に付壹合五勺位、壹升代五百六拾四文位、

御上様に而御國役御普請、小松原村分地渡し場近邊、兩淵土手方、外淵石砂に而、川表石垣に被遊、御普請手初、八月廿三日、初、桑原村御林、から松木伐出、引出人足、八月末、九月末迄被仰付、人足數多に而、其外矢代川原、横田川原、

土口川原、其外千曲川右村々下續川原々、柳伐出人足、川南村々江被仰付候、四ッ屋村邊々丹波島村下續迄、御國役御普請所江持參致、相納申候、

一金壹分貳百拾四文、下石川村平之丞後家おせき殿、苗代借

用致候に付、右七人わり合分、嘉右衛門殿江渡す、未十二月廿九日、

未三月廿四日夜大地震砌々、御殿様、櫻馬場江御小屋御掛被仰付、御出張被遊、其外諸御役人様方、并諸御役所御役人様方、其脇江御小屋御掛被成候而、御代官所御公事方御役所、御郡方御役所、道橋御役所、其外御役懸り品々御役所、一同御出張被遊、御用御取繼被成下候、

四月十一日、大瀬登様々當村御知行所四拾九名御百姓に、地震御見舞として御酒壹斗被下置候、御百姓中難有頂戴仕候、

四月廿三日、御地頭加藤了作様々地震満水爲御見舞、私方江(谷カ)そうめん七把被下置候に付、難有頂戴仕候、御地頭柳春幾人様々、御藏元與三郎殿、十二月廿日暮御上納配符請取之時節

に至り、御地頭様々御酒代と貳拾四文、其方江わり合と被申被遣候に付、難有頂戴仕候、御地頭望月主水様々、當春中地震満水に付、御知行所田畑共泥入砂入罷成、大小麥、菜種共押入、亦是田畑開發爲御手充、金壹分五百八文づゝ、御藏元新左衛門殿々わり合に而被遣候に付、請取難有頂戴仕候、

八月十七日御座候、六月廿五日、一金貳兩三分三匁、名主吉郎右衛門殿々請取、是は文化八年御類焼に付、御用達金貳分也、文政年中、御用達金貳分也、天保四巳年、御用達金壹兩也、御下ゲ金残り二ヶ年分金壹分三匁、弘化二巳年、御用達金爲

半分金壹兩也、爲御手充御下げ金被成下置、難有頂戴仕候、地震搖、翌申年正月三日夜々猶又初り、三日、四日、七日、八日、九日、十三日、十四日、同十七日々廿三日迄、晝夜時々搖、同廿三日夜、雪降出し、同廿四日五ッ時頃迄降續、雪五六寸程積申候、二月七日、八日、搖申候、猶又十三日、十四日、十五日、十六日迄、少々宛搖申候、名主安重殿配符被出候儀は、九月四日、漸々午年之配符被出候、地震二月廿六日四ッ時半頃、猶又搖申候、同廿八日明六ッ時半頃、中地震搖候に付、民家一同さわざ立申候、同廿九日夜八ッ時半頃、地震搖申候、三月朔日晝四ッ時頃、猶又地震搖申候、名主吉郎右衛門殿配符被出候儀は、二月晦日、漸々未年之配符被出候、地震三月二日入相時、搖申候、同三日九ッ時、少々搖申候、三月三日天氣は、明七ッ時頃々南風大造に吹出、明六ッ時半時、天氣宜敷様子に而、四ッ時頃迄天晴に而、四ッ時半時頃々雨少々宛降出、同七ッ時頃迄、少々宛降續申候、是々雨晴候得共、雲り居申候、同四日、南風一日吹候得共、天氣は雲り居、(曇)○以下、原本、一行程空白アリ、

信州御平川(幣)

宮入治兵衛様御報

當二月朔日五ツ三分時カ、天道様九分半御かけ被遊、四ツ七分迄に御座候、朔日は一日晴天に而御座候處、同夜入大雨降出し、翌二日一日降續申候處、翌三日朝晴申候而、御天氣相成申候處、猶又翌四日朝飯過カ、雪降出し、其日一日、同夜中降續申候處、凡貳尺餘も有之候様に而、同五日晴申候處、北風繁ク吹出し、一日吹申候、同六日、七日兩日、天氣宜敷候得共、同八日朝カ又候雪降出し、壹尺餘り茂降申候而、九ツ時カ雨之氣に而、又候直に雪に相成、一日降續申候、十一月七日五ツ時頃、同七ツ時頃、地震搖申候、同廿九日七ツ半時頃、搖申候、十二月十八日明六ツ時、同七ツ時頃、搖申候、同十八日四ツ時頃、南風吹出し強く、雨少々降出し、無間茂猶又北風強く、暮時カ雪少々宛降出し、其夜中雪ふり申候而、翌十九日五ツ時頃迄、降續申候處、壹尺餘り降申候、西之十二月廿四日明六ツ時頃、同八ツ時頃、同夜五ツ時頃、地震搖申候、夫カ雪降出し荒申候、翌戌之正月二日朝七ツ時頃、地震搖申候、同五日晝五ツ半時過頃、追々四ツ時頃、地震搖申候、夫カ同六日夜、雪降出し、五六寸程降、北風吹出し申候、同十二日夜四ツ

半時頃、相應之地震搖申候、同廿日四ツ半時頃、戌亥之方カ大造成火玉飛出し、東江飛、落所に而如雷鳴渡候、世人皆おそろしく存候、同三月十八日八ツ時頃カ雨降出し、同夜中大雨に而、翌十九日五ツ時頃、晴申候、夫カ晴天續申候處、同四月廿九日迄、天氣續候處、同夜中カ五月朔日朝迄、雨降續申候、猶又晴申候處、同五日九ツ時頃カ雨降出し、夜中降申候、翌六日四ツ時頃、晴申候處、夫カ上天氣に而御座候、同十日明七ツ時頃カ、大造成地震申候處、同十三日カ同廿一日頃迄、日々雨少々宛降續、其間天氣は宜敷處は只雲り申候、夫カ北風大造に吹出し、天氣は宜敷御座候得共、殊之外不順に而、無間茂田植に差掛り候得共、皆人綿入着出し、田植用意致申候、同廿四日苗取置、同廿五日カ田植致申候、同廿六日、同廿七日朝迄植申候、同廿六日九ツ半時頃、地震搖申候、同廿七日朝カ餘程如雷鳴り候而、九ツ時頃迄、折々之地震搖申候、同廿八日八ツ半時頃カ雨降出申候而、六月三日迄、晝夜共雨降申候間、同三日九ツ時頃、漸々晴申候處、千曲川并に犀川、殊之外大満水に而、本水門表向半分潰申候而、田水差支、田方流末一統に早相成申候同四日晝時カ早に致、三日半日程早、同八日、水漸々引取申候、翌九日夕飯後、追々四ツ時頃、大造成地震搖申候、引續少々宛如雷鳴搖申候、是カ續而少々宛

搖、皆人往來庭に飛出し申候、同十一日、猶又夕飯後五ツ時頃、大造成地震に而、皆人往來、又々庭(はカ)に飛出申候、是々夜中引續折々搖申候、同十二日朝六ツ時頃、又々搖申候、天氣は晴天に御座候得共、續而如雷折々鳴申候、同八ツ時頃搖申候、是々晴天續而宜敷御座候、同十五日八ツ時頃、白雨致申候處、同十六日五ツ時頃迄、雲り申候、又々天氣晴天に而續申候、同廿六日、地震搖申候、然處同廿五日の時候殊之外不順に而、世人綿入又は拾杯着候程之不順に而、第一稻作、以手外濫入すくみ相成、同廿五日夕七月七日迄、晝夜南風又は北風吹續申候、同九日八ツ時頃、地震搖、漸々天氣相成、同十六日四ツ時頃、地震搖申候、同廿日七ツ時頃、又々地震搖申候、同廿一日夕飯後、戌亥方に月輪之如く空光申候、南風吹出し、餘程大風御座候得共、八ツ時頃殊之外南風大風に而、千曲川南下戸倉村方上續村方居家五六軒、又々七八軒程、吹潰申候、松代竹山町上禪宗惠明寺様本堂、吹潰申候、其外村々大木杯所々に而吹折、又は根(者カ)こぎ致申候、同廿五日、二百十日御座候得共、稻作去月後(者カ)に而穗揃相成不申候而、早稻漸々穗出申候、は廿六日、同廿七日、同廿八日五ツ時頃、少々宛雨降申候處、漸々四ツ時頃晴天に而御座候、九月廿五日晝七ツ半時頃、地震搖申候、夫々十二月朔日明六ツ時頃、猶又候四ツ時

頃、兩度地震搖申候、寒に入口迄雪不降、天氣宜敷御座候處、寒に五日明七ツ時入、同六日明七ツ時頃、地震搖、同八日明七ツ時頃、餘程地震搖候に付、世人大造に驚申候、同六日夕雪折々降申候、

嘉永三年正月七日夕三日三夜之間、奥州松前箱立浦にて、一天(き)かけくもり、うなりひゞき、天地うごかし、箱立御番所戌亥彌太郎と申御代官、早馬に而懸付御見分有ければ、拓(俄カ)に一天晴渡り、あやしき鬼人あらわれ、我は此演(俄カ)に三千餘年住宅

する海神(使カ)の仕なるが、此年々七年之間まれなる豊年也、然れ共猛虎(いふカ)ゆう病はやり、余人七部通死すべし、依而我姿を門口にはり置物有之、其病なんをのがる事うたがいなしと言ふて消にける、

(月缺ク、三月カ)一日、少々宛雨降申候、同五日雲り居候得共、雨は降不申候、同五日夜がらす四聲啼申候は、私宅(申カ)北方に而、與惣治裏方寶呂寺境内に而啼存候、私宅寢間に而承り申候、同六日南風大造吹出し、雨は一日降續申候、殊之外不順時候、夕飯時

夜中雪降、同七日朝迄に凡三寸程積り申候、同七日五ツ時頃迄、雨降續申候、四ツ時晴申候、九ツ時、地震搖申候、同夜四ツ半時頃、少々許地震搖申候、同八日、一日天氣に而有之候處、翌九日夕雨降出し、同十二日五ツ時頃迄、日々雨降續申

候、

震災豫防調査報告第四十六號

乙

候、同十三日五ツ時頃、はれ申候、同四ツ時頃、地震貳度續而  
 搖申候故歟、是々天氣相成申候、同十四日朝日の出、天道様  
 近邊、てんまり手鞠如く黒き星數不知程出、上江上り、又は下江下  
 り申候、十六日、十七日、晝夜折々地震搖申候、同十八日四ツ  
 時頃、雲白雲黒雲出、寅之符がわの如く雲出申候、十四日晝  
 貳度、同夜三度、地震申候、十九日夜壹度、同廿日四ツ時頃壹  
 度、同夜壹度、同廿一日四ツ時頃壹度、地震搖申候、同廿四日  
 四ツ時頃、九ツ時頃、地震搖申候、同廿二日、同廿三日兩日、  
 朝々夜迄雲り居申候、廿二日朝、霜少々降申候、同廿四日朝、  
 猶又霜多分降申候、天氣は朝之内雲り居、五ツ半時頃々晴天  
 氣御座候、同廿五日明六ツ時頃、地震搖申候、朝々南風吹出  
 し、一日中吹、同廿六日明七ツ時頃、雨少々降申候、猶又同七  
 ツ時頃々雨降出し、次第に強く相成、夜中降申候而明六ツ時  
 頃晴申候、同廿七日、北風吹出し雲り居、五ツ時頃、天氣罷成  
 候、同廿八日八ツ時頃々雨降出し、翌明六ツ時はれ申候、晝  
 時頃、地震搖申候、晝時續而三度、夜壹度搖申候、四月二日日  
 出、今日様近邊、黒き星數不知上江上り下下り、てんまり如  
 く成星出申候、同三日四ツ時頃、地震搖申候、同四日四ツ時頃  
 三度、同五日夜四ツ時頃壹度、八ツ時頃貳度、地震搖申候、同  
 六日、一日雨降申候、同七日雲り居、一日南風吹出し、同夜四

ツ時頃々雨降出し、同八日、雨降申候、翌九日、雨晴天氣相成  
 申候、同夜四ツ半時過頃、餘程之地震、貳度搖申候、同九日、  
 御上様御藏屋敷江、役人之内壹人罷出候様、同七日夜御觸參  
 り候間、同九日、役人長四郎殿出役被致候處、被仰渡候儀は、  
 去未春中變災に付、犀口水堰に掛り、土築普請出精に付、  
 爲御褒美錢貳貫五百文被下之置候、同九日夜八ツ時頃、少々  
 許地震搖申候、同十日、三役人頭立小前總壹人、御勘定所御  
 屋敷江罷出候處、同八日、御觸參り候に付、名主繁治殿、組頭  
 作太殿、長百姓雄治殿、頭立彌茂八殿、小前總代嘉兵衛殿、都  
 合五人出役被致候處、被仰渡候儀、去未之三月中變災に付、  
 格別變災多に而、山中筋數ヶ村に有之、甚だ御不便に被思召  
 候處、御手も届兼候間、此度融通、年拾八歳方以上男六拾歳  
 限、壹ヶ月百文宛出錢致候様被仰渡候、其外年拾八歳方婦人  
 六拾歳限婦人は、壹ヶ月三拾貳文宛、何に而も平日稼之外、  
 出金致候様被仰渡候、翌十一日朝飯後、三役人頭立之者、右  
 被仰渡候に付、内相談被致候、同十三日七ツ時頃、相應之地  
 震搖申候、十四日五ツ時頃、御殿様、御農掛御駕籠御乘被  
 遊、御家老小山田采女様御跡に而、御供方迄凡百人程に而、御  
 通行被遊、山中孫瀨村空藏虛脱カ山御見分被遊御越、下石川村源之  
 介殿方御朝御膳、御晝飯、田野口村小林藏内殿江被仰付候、



御歸り御小休、當村與三郎殿江御本陣被仰付候、隣家大藏殿方は、小山田采女様御小休御宿被仰付候、同日御戻り御小休御座候、與三郎殿方に而、赤飯に煮込相添奉獻候處、少々許御手御附被遊候而、松代表江御持參被遊候、赤飯は下之御役人様江茂奉差上、御供方迄差上候、四月十六日七ツ半時頃、貳度地震搖申候、同十九日夜明六ツ時、相應之地震搖申候に付、居家方庭江家内之者一同飛出し申候、其後折々搖申候、凡五六度程雷之音之如くに而搖申候、同十六日、地震搖候か、少々宛夕方方雨降申候、同十七日八ツ時頃迄、少々宛雨降、又候晴候而は天氣に相成、又は雨降、品々に天氣くるい申候、八ツ半時頃方北風繁く、雨は白雨繁く、誠におそろしく、雨風は繁く御座候、同十七日夜四ツ時過頃、雨晴申候、同十八日天氣御座候、同十九日、天氣宜敷御座候、當四月十一日、男女十八歳方六拾歳迄、男壹ヶ月百文宛、女壹ヶ月三十貳文宛、手稼出精緻、上納可致候様被仰渡候に付、當村男十八歳方六拾歳迄、男百三十貳人、此錢拾三貫貳百文、女百三十拾人、此錢四貫三百文、二口百壹ヶ月拾七貫六百文、總べ壹年分貳百拾壹貫貳百文、同十九日夜四ツ時頃、地震少々宛三度搖申候、翌廿日天氣宜敷、暖に御座候、夕方白雨に而降申候、夜八ツ時頃、地震少々宛三度搖申候、翌廿一日、晴天氣

宜敷候得共、四ツ時、辰巳之方方雷之如く音鳴致候、同廿六日方不勝之天氣、日々くもり、日々少々宛雨降申候、同廿九日夜迄、同廿八日七ツ半時頃、地震搖申候、猶又夕飯後六ツ八分頃、地震搖申候、六月朔日七ツ時頃、同二日五ツ時頃、同三日四ツ時頃、地震搖申候、同四日明六ツ時頃、同五日明六ツ時頃、貳度地震搖申候、天氣不勝に而、四日は晝前雲り居、晝九ツ半時頃方雨降出し、同夜中降續、同五日雨降申候、同七日明六ツ時、同八日九ツ時頃、少々宛地震搖申候、同十四日明六ツ時頃、猶又地震搖候、

水内村追譯より

こま拜

御平川村

宮入治兵衛様

人々御中

私宅江着致候間、披見致候、

右は手紙表書、

裏書寫、

乍憚此手紙、御平川村表名面方迄、御届け被下候様奉願候、以上、

大日本地震史料 卷之十四 終